

# 有価証券報告書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度 自 2018年4月1日  
(第72期) 至 2019年3月31日

**ソマール株式会社**

(E02673)

# 目 次

	頁
表紙	
<b>第一部 企業情報</b> .....	1
<b>第1 企業の概況</b> .....	1
1. 主要な経営指標等の推移 .....	1
2. 沿革 .....	3
3. 事業の内容 .....	4
4. 関係会社の状況 .....	6
5. 従業員の状況 .....	7
<b>第2 事業の状況</b> .....	8
1. 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等 .....	8
2. 事業等のリスク .....	10
3. 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 .....	11
4. 経営上の重要な契約等 .....	16
5. 研究開発活動 .....	16
<b>第3 設備の状況</b> .....	18
1. 設備投資等の概要 .....	18
2. 主要な設備の状況 .....	18
3. 設備の新設、除却等の計画 .....	19
<b>第4 提出会社の状況</b> .....	20
1. 株式等の状況 .....	20
(1) 株式の総数等 .....	20
(2) 新株予約権等の状況 .....	20
(3) 行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等 .....	20
(4) 発行済株式総数、資本金等の推移 .....	20
(5) 所有者別状況 .....	21
(6) 大株主の状況 .....	21
(7) 議決権の状況 .....	22
2. 自己株式の取得等の状況 .....	22
3. 配当政策 .....	23
4. コーポレート・ガバナンスの状況等 .....	24
(1) コーポレート・ガバナンスの状況 .....	24
(2) 役員の状況 .....	26
(3) 監査の状況 .....	28
(4) 役員の報酬等 .....	29
(5) 株式の保有状況 .....	32
<b>第5 経理の状況</b> .....	36
1. 連結財務諸表等 .....	37
(1) 連結財務諸表 .....	37
(2) その他 .....	68
2. 財務諸表等 .....	69
(1) 財務諸表 .....	69
(2) 主な資産及び負債の内容 .....	78
(3) その他 .....	78
<b>第6 提出会社の株式事務の概要</b> .....	79
<b>第7 提出会社の参考情報</b> .....	80
1. 提出会社の親会社等の情報 .....	80
2. その他の参考情報 .....	80
<b>第二部 提出会社の保証会社等の情報</b> .....	81
[監査報告書]	

## 【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2019年6月26日
【事業年度】	第72期（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）
【会社名】	ソマール株式会社
【英訳名】	SOMAR CORPORATION
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 曾谷 太
【本店の所在の場所】	東京都中央区銀座四丁目11番2号
【電話番号】	03-3542-2151
【事務連絡者氏名】	F & A部長 今井原 俊彦
【最寄りの連絡場所】	東京都中央区銀座四丁目11番2号
【電話番号】	03-3542-2151
【事務連絡者氏名】	F & A部長 今井原 俊彦
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

(注) 第72期第1四半期連結会計期間より、日付の表示を和暦から西暦に変更しております。

## 第一部【企業情報】

### 第1【企業の概況】

#### 1【主要な経営指標等の推移】

##### (1) 連結経営指標等

回次	第68期	第69期	第70期	第71期	第72期
決算年月	2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高 (千円)	23,892,152	23,564,891	20,941,566	22,514,514	23,048,092
経常利益又は経常損失 (△) (千円)	△350,975	743,088	591,545	1,004,399	941,720
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失 (△) (千円)	△2,759,603	971,463	511,652	911,887	795,741
包括利益 (千円)	△1,540,573	22,260	597,580	1,010,924	508,606
純資産額 (千円)	10,554,833	10,542,177	11,139,051	12,086,980	12,497,179
総資産額 (千円)	22,193,235	18,238,380	18,782,546	20,391,070	20,549,004
1株当たり純資産額 (円)	5,430.89	5,425.62	5,733.91	6,226.59	6,439.73
1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失 (△) (円)	△1,419.85	499.93	263.35	469.57	410.00
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	47.6	57.8	59.3	59.3	60.8
自己資本利益率 (%)	△24.4	9.2	4.7	7.9	6.5
株価収益率 (倍)	—	4.3	7.6	6.3	4.6
営業活動によるキャッシュ・フロー (千円)	△80,654	1,078,358	1,044,612	920,719	222,988
投資活動によるキャッシュ・フロー (千円)	△147,213	1,223,838	△201,164	△250,325	△478,334
財務活動によるキャッシュ・フロー (千円)	△101,584	△3,001,452	△401,270	△62,474	△98,091
現金及び現金同等物の期末残高 (千円)	4,369,665	3,679,683	4,087,788	4,641,484	4,240,259
従業員数 (人)	399	404	406	417	438

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため、また、第68期においては1株当たり当期純損失であることから、記載しておりません。

3. 株価収益率については、第68期は親会社株主に帰属する当期純損失を計上しているため、記載を省略しております。

4. 2017年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行いました。これに伴い、1株当たり純資産額、1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失については、第68期の期首に当該株式併合が行われたと仮定して算定しております。

5. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日）等を当連結会計年度の期首から適用しており、前連結会計年度に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

## (2) 提出会社の経営指標等

回次	第68期	第69期	第70期	第71期	第72期
決算年月	2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高 (千円)	22,721,316	22,317,445	19,634,672	20,934,509	20,818,185
経常利益 (千円)	462,532	982,120	328,084	660,812	446,697
当期純利益又は当期純損失 (△) (千円)	△2,804,488	858,520	264,116	608,224	343,368
資本金 (千円)	5,115,224	5,115,224	5,115,224	5,115,224	5,115,224
発行済株式総数 (千株)	19,587	19,587	19,587	1,958	1,958
純資産額 (千円)	9,420,554	9,830,506	10,407,381	10,946,180	11,033,143
総資産額 (千円)	20,978,409	17,504,722	17,918,286	19,189,356	18,832,933
1株当たり純資産額 (円)	4,847.26	5,059.36	5,357.28	5,638.91	5,685.32
1株当たり配当額 (円)	—	—	3	50	50
(うち1株当たり中間配当額)	(—)	(—)	(—)	(—)	(—)
1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失 (△) (円)	△1,442.95	441.81	135.94	313.20	176.92
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	44.9	56.2	58.1	57.0	58.6
自己資本利益率 (%)	△26.5	8.9	2.6	5.7	3.1
株価収益率 (倍)	—	4.9	14.7	9.4	10.7
配当性向 (%)	—	—	22.1	16.0	28.3
従業員数 (人)	311	304	301	305	322
株主総利回り (%)	89.7	106.4	99.5	148.0	99.0
(比較指標: TOPIX) (%)	(128.3)	(112.0)	(125.7)	(142.7)	(132.3)
最高株価 (円)	295	300	231	4,500 (348)	3,090
最低株価 (円)	160	169	161	2,926 (181)	1,621

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため、また、第68期においては1株当たり当期純損失であることから、記載しておりません。

3. 第68期の株価収益率及び配当性向については、当期純損失を計上しており無配であるため、第69期の配当性向については、無配であるため記載を省略しております。

4. 2017年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行いました。これに伴い、1株当たり純資産額、1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失については、第68期の期首に当該株式併合が行われたと仮定して算定しております。第71期の株価については、株式併合後の最高株価及び最低株価を記載しており、( )内に株式併合前の最高株価及び最低株価を記載しております。

5. 最高株価及び最低株価は、東京証券取引所(市場第二部)におけるものであります。

6. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)等を当事業年度の期首から適用しており、前事業年度に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

## 2 【沿革】

1943年第二次世界大戦の戦時体制下、物資不足の中で曾谷正（当社創業者）が兵庫県揖保郡に個人経営で、この地域の特産品イ草を利用して畳の製造を行うため工場を建設し、製畳関係の商いを開始しました。戦局の暗雲たなびく厳しい時局を経て我が国が歴史上経験したことの無い敗戦の廃虚の中で、建設資材関係等へと業容を伸展させ今日の基礎が形成されました。

1948年 2月	事業の規模拡大に伴い曾谷正（当社初代社長）が神戸市中央区栄町通において資本金 195千円にて兵庫建材株式会社を設立。
1948年 3月	輸入農薬の市場開発を開始し、化学品専門商社として第一歩を踏み出す。
1948年 8月	本社を神戸市中央区下山手通に移転。
1949年 6月	丸正産業株式会社に商号変更。
1952年 6月	東京営業所開設（1962年10月本社移転に伴い本社に吸収）。
1956年 3月	大阪営業所開設（1958年10月本社移転に伴い本社に吸収）。
1956年 4月	小台研究所（東京都足立区）を開設。
1958年10月	本社を大阪市北区梅田に移転。
1959年 1月	名古屋営業所開設（現 名古屋支店）。
1962年10月	本社を東京都中央区銀座四丁目に移転 （本社移転に伴い大阪本社は大阪営業所（現 大阪支店）となる）。
1962年11月	小台研究所を分離独立させ、ソマール工業株式会社を設立し、研究開発と製造の拠点とする。
1967年 2月	ソマール工業株式会社を埼玉県草加市に移転（現 草加事業所）。
1984年 1月	ソマール工業株式会社を吸収合併、「ソマール株式会社」に商号変更。
1985年 8月	日本証券業協会東京地区協会の店頭売買銘柄に登録。
1986年 6月	草加事業所のN計画（研究棟・生産棟・エネルギー棟等の建設及びビューティリティー充実）完成。
1988年10月	東京証券取引所市場第二部に株式を上場。
1989年12月	スイス・フラン建転換社債 6,000万スイスフランを発行。
1995年 8月	品質マネジメントシステムの国際規格 ISO 9001 認証を取得。
1998年 9月	環境マネジメントシステムの国際規格 ISO 14001 認証を取得（第二次N計画実施に伴い、2001年11月再取得）。
2001年 8月	草加事業所の第二次N計画実施（新コーティング工場の建設、製造インフラ設備の強化）。
2006年 4月	香港に索馬龍（香港）有限公司（現・連結子会社）を設立。
2007年 5月	中国広東省に索馬龍精細化工（珠海）有限公司（現・連結子会社）を設立。
2008年 6月	宮城県仙台市青葉区にソマテック株式会社（2016年 2月 清算終了）を設立。
2008年 9月	台湾台北県中和市に台湾索馬龍股份有限公司（現・連結子会社）を設立。
2008年10月	タイバンコク都にSiam Somar Co., Ltd.（現・連結子会社）を設立。
2011年 5月	タイチョンブリ県にChonburi Factory (Siam Somar Co.,Ltd.) を竣工。
2013年10月	高機能材料事業の北米OEM生産拠点を構築。
2014年 1月	インドカルナータカ州（バンガロール市）にSomar Corporation India Pvt.Ltd.（現・連結子会社）を設立。
2014年 8月	中国広東省に高欄港工場（索馬龍精細化工（珠海）有限公司）を竣工。
2014年 9月	自動車業界の製造業における国際規格 ISO/TS 16949 認証を取得。
2017年 4月	米国ニューヨーク州にSomar North America Corporation（現・連結子会社）を設立。
2018年 9月	自動車業界の製造業における国際規格 IATF 16949 認証を取得。
2018年12月	オランダ北ホラント州にSomar Europe B.V.（現・非連結子会社）を設立。
2019年 2月	ベトナムハノイ市にSOMAR VIETNAM CORPORATION Co.,Ltd.（現・非連結子会社）を設立。

### 3 【事業の内容】

当社グループ（当社及び当社の関係会社）は、当社、子会社8社（索馬龍(香港)有限公司、索馬龍精細化工(珠海)有限公司、台灣索馬龍股份有限公司、Siam Somar Co., Ltd.、Somar Corporation India Pvt. Ltd.、Somar North America Corporation、Somar Europe B.V.、SOMAR VIETNAM CORPORATION Co.,Ltd.）、その他の関係会社等によって構成されております。

当社グループの事業内容は以下のとおりであります。

なお、次の4事業は「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1)連結財務諸表 注記事項」に掲げるセグメント情報の区分と同一であります。

#### (1) 当社及び子会社

##### ① 高機能材料事業

(コーティング製品)	電子部品用フィルム、粘接着フィルム、精密部品用フィルム 産業資材用フィルム、設計・複写用フィルム、サイン用フィルム、受託生産
(高機能樹脂製品)	電気絶縁用樹脂、電子部品用接着・封止樹脂、レジスト材料、洗浄剤
(電子材料)	回路基板材料、回路形成材料、アラミッド材料、機能性フィルム
(機能性樹脂)	熱硬化性樹脂、熱可塑性樹脂、樹脂用添加剤

##### ② 環境材料事業

(ファインケミカルズ)	工業用殺菌剤、製紙用ケミカルズ
(製紙用化学品)	紙塗工用バインダー、製紙関連ケミカルズ

##### ③ 食品材料事業

(食品素材等)	増粘安定剤、乾燥野菜、食品添加物
---------	------------------

##### ④ その他の事業

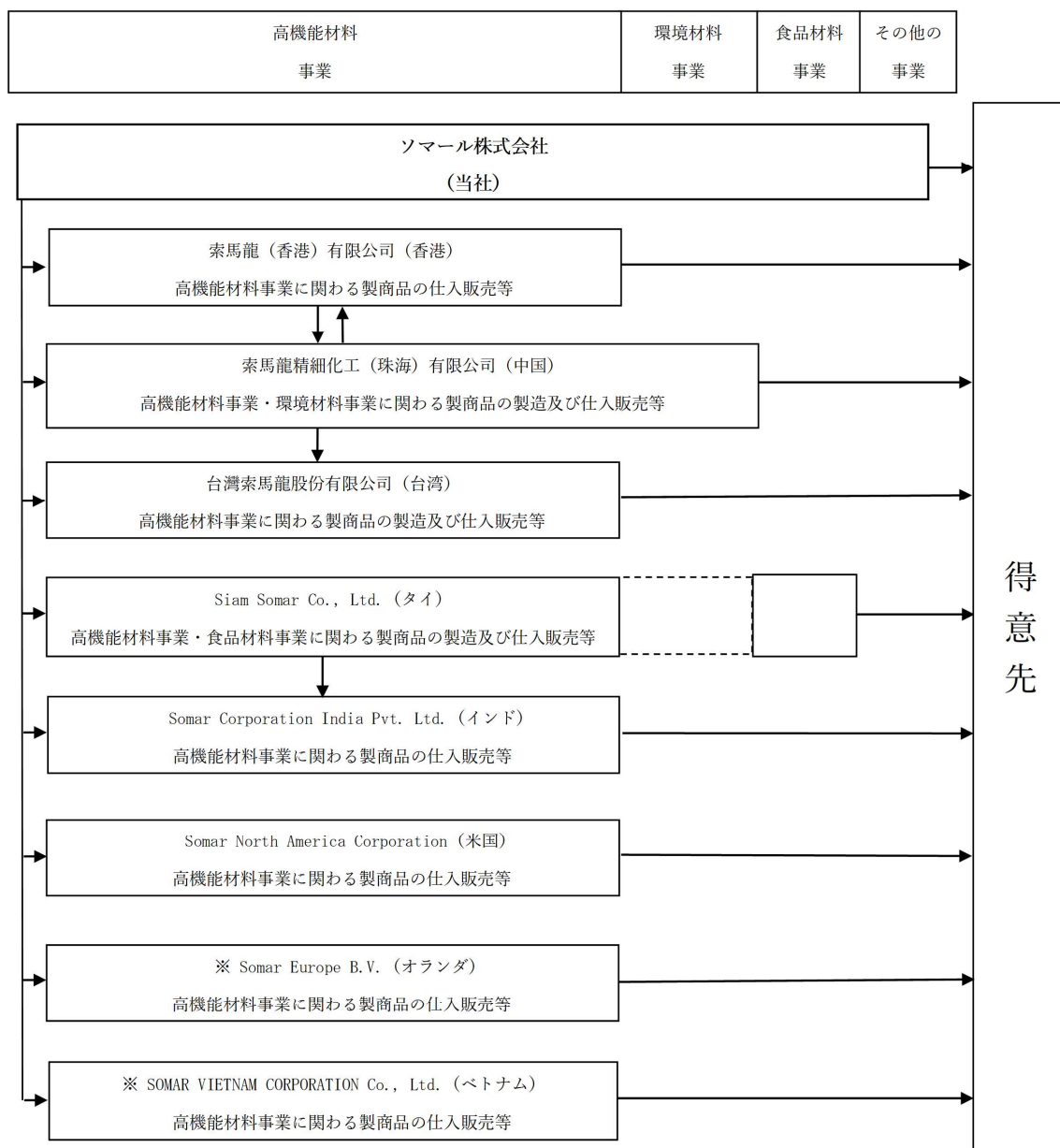
新規開発事業関連製商品

#### (2) その他の関係会社等

(株)ナガタコーポレーションはゴルフ練習場経営を行っており、(株)シンクは総合リース業、ゴルフ場用品の販売及び保険代理業、(有)対和は投資顧問業、(株)宗屋は主にゴルフ場経営及び不動産賃貸管理業、多摩興産(株)はゴルフ場経営を行っております。その他の関係会社等各社の事業活動と、当社及び子会社の事業活動の間に関連性はありません。

(事業系統図)

事業の系統図は次のとおりであります。



(注) 1. 図中の → は主要な商品、製品の流れを示しております。

2. 無印は連結子会社、※は非連結子会社で持分法非適用会社であります。



#### 4 【関係会社の状況】

名 称	住 所	資本金	主要な事業内容	議決権の 所有割合又は 被所有割合 (%)	関 係 内 容
(連結子会社) 索馬龍（香港）有限公司 (注) 1	香港	31,500 千US\$	高機能材料事業	100.0	当社製品・商品の販売 役員の兼任等…有
索馬龍精細化工（珠海） 有限公司 (注) 1、2	中国 広東省	12,000 千US\$	高機能材料事業 環境材料事業	100.0 (100.0)	当社製品・商品の販売 役員の兼任等…有
台灣索馬龍股份有限公司 (注) 2	台湾 新北市	70,000 千NT\$	高機能材料事業	100.0 (100.0)	当社製品・商品の販売 役員の兼任等…有
Siam Somar Co., Ltd. (注) 1、2	Bangkok, Thailand	450,000 千THB	高機能材料事業 食品材料事業	100.0 (100.0)	当社製品・商品の販売 役員の兼任等…有
Somar Corporation India Pvt. Ltd. (注) 2	Karnataka, India	85,500 千INR	高機能材料事業	100.0 (99.9)	当社製品・商品の販売 役員の兼任等…無
Somar North America Corporation (注) 2	New York, U. S. A.	1,000 千US\$	高機能材料事業	100.0 (100.0)	当社製品・商品の販売 役員の兼任等…有
(その他の関係会社) ㈱ナガツタコーポレーション (注) 3	東京都 中央区	10,000 千円	ゴルフ練習場経営	被所有 25.0	役員の兼任等…無
㈱シンク (注) 2、4	東京都 中央区	10,000 千円	総合リース業 ゴルフ場用品の販売 保険代理業	被所有 25.0 (25.0)	保険料の支払 役員の兼任等…無
㈲対和 (注) 2	東京都 中央区	5,000 千円	投資顧問業	被所有 25.0 (25.0)	役員の兼任等…無
㈱宗屋 (注) 2	東京都 中央区	80,000 千円	ゴルフ場経営 不動産賃貸管理業等	被所有 23.6 (12.4)	本社ビル等の賃借 役員の兼任等…無
多摩興産㈱ (注) 5	東京都 中央区	20,000 千円	ゴルフ場経営	被所有 12.4	役員の兼任等…有

(注) 1. 特定子会社に該当しております。

2. 議決権の所有割合又は被所有割合の（ ）内は、間接所有割合又は間接被所有割合を内数で示しております。

3. ㈱ナガツタコーポレーションは㈱シンクの100%子会社であります。

4. ㈱シンクは㈲対和の100%子会社であります。

5. 多摩興産㈱は㈱宗屋の100%子会社であります。

6. 連結子会社の主要な事業の内容欄には、セグメントの名称を記載しております。

## 5 【従業員の状況】

### (1) 連結会社の状況

2019年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数（人）
高機能材料事業	348
環境材料事業	38
食品材料事業	11
報告セグメント計	397
その他の事業	2
全社（共通）	39
合 計	438

(注) 全社（共通）として記載されている従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門に所属しているものであります。

### (2) 提出会社の状況

2019年3月31日現在

従業員数	平均年齢	平均勤続年数	平均年間給与
322人	41歳2ヵ月	14年10ヵ月	5,168,300円

セグメントの名称	従業員数（人）
高機能材料事業	232
環境材料事業	38
食品材料事業	11
報告セグメント計	281
その他の事業	2
全社（共通）	39
合 計	322

(注) 1. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。  
2. 全社（共通）として記載されている従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門に所属しているものであります。

### (3) 労働組合の状況

労使関係は安定しており、特記すべき事項はありません。

なお、当社の労働組合（ソマール労働組合）は、2015年10月をもって活動を休止しておりますが、各事業所従業員代表者が投票による過半数により選出され、労働組合の代替機能としての役割を担っております。

## 第2【事業の状況】

### 1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

#### (1) 経営方針

当社グループは、「高い企業倫理観のもとで、真に社会に貢献できる企業となることを目指す」とする当社グループの経営理念に沿って、長年培ってきた独自のコア技術を更に強化するとともに、これら技術を総合的に活用して独自の事業領域を構築し、顧客に存在価値を認められる開発型企业としての位置づけを更に高めてまいります。

また、グローバルに通用する企業品質を心がけ、将来に向けた成長分野と市場で重点的な事業展開を行うとともに、未来を切り拓く次世代技術にも積極的にチャレンジしてまいります。

#### (2) 経営戦略等

当社グループが長年関わってきた電子回路基板や自動車電装部品、更にはデジタル光学機器部品などを中心とするエレクトロニクス関連分野は、当社グループ独自のコア技術が特に活用でき、今後も成長が見込まれる重要分野と位置づけており、市場の拡大が期待できる海外新興市場や堅調な成長が続く北米市場などでの事業活動を積極的に推進するとともに、事業領域を広げる新たな市場の開発や技術開発にも果敢にチャレンジして、共同開発やOEM製品の提供、更には受託製造といった「テクノロジーパートナー」としての存在価値を高め、企業の社会的責任を果たしてまいります。

#### (3) 経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

当社グループは、継続的な企業価値の増大を最も重要な経営課題として認識し、売上高営業利益率や総資産経常利益率といった事業や資本の効率性の指標を重視しながら、営業利益等の各利益金額の増加及びキャッシュ・フローの創出等を重要な経営指標として掲げております。

高付加価値製品の拡販や新製品の開発などを進展させつつ、グローバル展開を更に強化し、海外地域における事業活動を活発化させることで、今後とも経営指標の向上に向けて諸施策を実施して、業績の拡大及び企業価値の増大を図ってまいります。

(重視する経営指標等)

	達成目標	実績	
		第72期 (当連結会計年度)	第71期 (前連結会計年度)
売上高営業利益率	4.0%	3.9%	4.6%
総資産経常利益率 (ROA)	5.0%	4.6%	5.1%
自己資本比率	60.0%	60.8%	59.3%
海外地域売上比率	20.0%	21.6%	18.3%

当連結会計年度の期首より、「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)等を適用しており、第71期は、遡及修正後の数値となっております。

#### (4) 経営環境

政府の継続した経済対策や日銀の金融緩和政策のもと、上半期では、比較的堅調な海外経済にも支えられて企業業績や雇用・所得環境の改善が続き、わが国経済は緩やかな回復基調を維持しました。

しかしながら、下半期に至り、とりわけ米中貿易摩擦を中心とした米中間の対立や英国のEU離脱の問題、更には、中東・東アジアで継続する地政学リスクなどによって、世界経済の減速が鮮明となり、こうした状況から、わが国経済も下方局面への転換が徐々に進行して、先行き予断を許さない厳しい状況となっております。

当社グループは、人々の暮らしに直結した幅広い業界に関わっておりますが、なかでも、スマートフォンやデジタルカメラといった情報端末機器で代表されるエレクトロニクス関係業界や、IT化・自動化が一段と進展する自動車関係業界、更には、製紙や食品といった業界などに深く関わってまいりました。そうした業界では、経済のグローバル化やわが国の少子高齢化を背景として国内需要の縮小が進行し、そのため、事業の軸足を海外市場へと移行させております。これに加えて、とりわけエレクトロニクスや自動車の業界では、人々の価値観の多様化の進展に伴い関連する製商品やサービスに対する要求が複雑・高度化し、かつ、その変化のスピードが一段と速まっており、その結果として、競合各社間の競争が益々激しさを増す厳しい経営環境となっております。

#### (5) 事業上及び財務上の対処すべき課題

当社グループは、業績の持続的な向上と社会への更なる貢献を目指して、社会が求める課題の解決や新たな価値の創造に取り組み、長年培ってきた経営資源をベースにして、事業の重点化と他社との差別化を重視した事業運営を積極的に推進してまいりました。

今後は引き続き、当社グループの経営方針に沿って、当社グループ独自の技術や情報を総合的に活用し、国内市場はもとより、グローバルな成長市場で積極的な事業展開を推進してまいります。とりわけ次に記載する事項は、当社グループが次のステージへと飛躍するために取り組むべき重要な課題と認識し、スピーディーな経営判断と各施策の着実な実施を通して成果を積み重ねながら、企業価値の向上に努めてまいります。

##### ① 当社グループの経営資源を生かした新規事業領域の育成

当社グループの収益を高め、持続的な成長を果たしていくためには、当社グループの強みを生かした既存事業の強化は勿論のこと、特長ある新たな事業領域の開拓が不可欠です。

当社グループの中核事業である高機能材料事業では、例えば、長年深く関わってきた電子部品や自動車電装部品などの業界に加え、これまで培ってきた独自の技術や情報を活用して、新たに建築構造部材の領域にもビジネスをスタートさせました。また、環境材料事業の水処理分野では、従来からの製紙業界に加え、新たな素材も導入しながら電子部品やその他の業界にも独自のチャレンジを進めております。

こうした新たな事業領域を切り開くための開発の芽を今後も積極的に育てながら、かかる芽を事業の1つの柱となるまで大きく成長させていくことが急務であります。

そのためには、次代を担うグローバルな人材を積極的に登用・育成し、社会が直面する様々な課題の解決能力を強化しながら、一方では、社内の経営資源のみに頼ることなく、他企業との連携や産学連携、更にはM&Aといった様々な選択肢も視野に入れながら、引き続き積極的なチャレンジを続けてまいります。

##### ② 経済のグローバル化に対応した独自の情報・生産・物流網の強化

経済のグローバル化とともに、当社グループの主要な取引先も生産拠点を海外の成長市場へと積極的に移転を進め、これに呼応して当社グループも、取引先からの様々な要望に適切に応えていくため、グローバルなサプライチェーンの構築に鋭意努めてまいりました。

その結果として、当社グループの当連結会計年度の海外地域売上高は、連結売上高の21.6%を占めるまでに成長し、海外市場の重要性が一段と高まっております。当社グループが得意とする自動車電装部品の業界や様々な電子部品の業界は、まさしく世界規模でのビジネス活動を展開しており、かかる業界の需要をよりグローバル視点での的確に捉え対応していくため、当社グループは2018年12月にはオランダに、また2019年2月にはベトナムにも新たな拠点を構築し、当社グループの発展に生かすべく活動を始めました。

今後は、当社グループが持つこうしたグローバル拠点を通して、海外市場の様々な情報をスピーディーかつ的確に把握し、各市場の潜在的なニーズも掘り起こしながら、顧客の課題解決に応える特長ある斬新な生産・物流網を再構築して、引き続きその機能強化に努めてまいります。

##### ③ 当社グループの競争力を高め社会への貢献に資するガバナンス体制の強化

政府の成長戦略の一環として策定されたコーポレートガバナンス・コードが、2015年6月から上場企業に適用され、2018年6月にはその一部改訂も行われて、企業のガバナンスの重要性が益々社会に認識されるようになっております。しかしながら、企業の不祥事は様々な形で継続し後を絶つことがあります。企業の存立は様々なステークホルダーとの信頼の上に成り立っており、かかる認識に立脚した企業経営が益々求められております。

わが国企業の最近の不祥事発生事例では、とりわけ大企業における様々な不祥事の発生が注目を浴びており、発生の際は国内に留まらず、経営の目が届きにくい海外の子会社にも広く及んでおります。

こうした状況に鑑み、グローバルに事業を拡大している当社グループとしましては、引き続きグローバル視点でガバナンス体制の強化に取り組んでまいります。

当社グループが長年培ってきた良き経営理念を大切に、役員自ら率先垂範してその経営理念を生かした行動を実践し、当社グループのあるべき姿と価値観を全社員が共有して事業活動ができるよう、経営者自ら様々なコミュニケーションに努めております。

当社グループは、引き続き社外取締役や社外監査役といった独立性の高い社外役員などによる経営監視のもとで、コーポレートガバナンス・コードの趣旨を生かした経営に努め、当社グループの持続的な発展と企業価値の向上に資するガバナンス体制となるよう、今後も継続した改善に取り組んでまいります。

## 2 【事業等のリスク】

当社グループの経営成績及び財政状態等に影響を及ぼす可能性のあるリスクは以下のようなものがあり、これらのリスクは投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項と考えております。それ故当社グループは、これらのリスクの発生の可能性を認識した上で、発生の回避及び発生した場合の迅速な対応に鋭意努めてまいります。

なお、文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

### (1) 全般的事項

当社グループは、コーティング製品・高機能樹脂製品・ファインケミカルズ等の製造販売及び電子材料・機能性樹脂・製紙用化学品・食品素材等の仕入販売に係る業務を行っております。

製造販売については、競合他社との品質や価格の競争激化に加え、国際的な原油価格の市況や為替レートの変動等により当社グループの原材料の購入価格が上昇した場合、技術開発部門が研究開発の成果として販売先の要求や市場動向に合わせてタイムリーに新製品を投入できない場合、製品に欠陥が生じた場合等には、販売数量の減少、販売価格の下落及び製造原価の上昇により、当社グループの業績及び財政状態に悪影響を与える可能性があります。

仕入販売については、販売先の業界及び最終製品を製造する業界全体の動向に加えて、当社グループの仕入先の生産供給体制により販売数量及び価格が変動する可能性があります。また、競合他社が同種品を廉価で販売したり、高機能・高付加価値の新商品を市場に新規投入する等によって価格競争が激化した場合、仕入先と販売先が直取引を行った場合等には、販売数量の減少及び販売価格の下落により、当社グループの業績及び財政状態に悪影響を与える可能性があります。

上記以外に、国内の景気変動だけでなく海外における景気変動や政治情勢の変化、通貨価値の変動、社会的混乱、自然災害や火災等の災害、環境・リサイクル・食品の安全性等に関わる当社グループの取扱製品・商品への規制を含めた法制度の変化等により、当社グループの業績及び財政状態に悪影響を与える可能性があります。

### (2) 債権の回収可能性について

必要十分な債権管理は実施しておりますが、当社グループの取引先が債権の弁済に重大な問題が生じた場合等には、引当金の追加計上又は貸倒損失の発生により、当社グループの業績及び財政状態に悪影響を与える可能性があります。

### (3) 退職給付債務について

当社は、従業員に対して確定給付型の退職給付制度を設けております。今後の割引率の低下及び運用利回りの悪化は退職給付費用及び未認識数理計算上の差異の増加となり、当社の業績及び財政状態に悪影響を与える可能性があります。

なお、当社がこれまで加入してきた日本電子回路厚生年金基金（総合型）は、2017年3月31日付で厚生労働大臣より解散の認可を受けました。これに伴い、当社は当該制度に代えて、独自に確定拠出年金制度（企業型）を新たに導入し、同年7月1日よりその運用を開始しました。

### (4) 特定の取引先への依存について

当社グループは、仕入販売に係る製紙用化学品（とりわけ紙塗工用バインダー）や回路基板材料用の電子材料及び機能性樹脂の一定割合を、特定の取引先から購入しております。

当社グループとこれらの特定の取引先とは、これまで長年に亘り緊密かつ良好な関係にあり、今後もこれまでの取引関係を維持・発展させていく方針であります。特定の取引先の今後の経営方針が当社グループの業績及び財政状態に影響を与える可能性があります。

### (5) 保有する有価証券の価格変動について

当社は、金融機関や取引に関連する会社等の株式等を政策的に保有しており、株式市場の動向や投資先企業の実況等によっては、当社の業績及び財政状態に影響を与える可能性があります。

### 3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

#### 業績等の概要

##### (1) 業績

当連結会計年度のわが国経済は、政府の継続した経済政策や日銀の金融緩和政策のもと、次のような状況となりました。まず、上半期では、度重なる自然災害の影響を受けたものの、比較的堅調な海外経済にも支えられて、企業収益の回復や雇用・所得環境の改善が継続し、景気は緩やかな回復基調を維持しました。しかしながら、下半期では、とりわけ米中貿易摩擦を中心とした米中間の対立や英国のEU離脱の問題、更には、中東・東アジアで継続する地政学リスクなどによって、世界経済の減速が鮮明となり、こうした背景から、わが国経済も下方局面への転換が徐々に進行して、先行き予断を許さない不安な影を投げかけております。

こうした状況下で当社グループは、原材料価格や物流費の値上げといった事業コストの上昇圧力が続く厳しい経営環境の中で、引き続き当社グループの特長を生かした事業運営とスピーディーな経営判断を心がけ、関係するグローバル市場での様々な変化やその影響を分析しながら、国内市場はもとより、中国・アジアの成長市場や米国及びその周辺市場など、幅広い関係市場で独自の差別化製商品の拡販と新規顧客の開拓に努め、更には、当社グループ全体の生産・物流の効率化などにも継続して取り組んでまいりました。

その結果、当連結会計年度の業績は、売上高が230億4千8百万円（前年同期比2.4%増）、営業利益が8億9千1百万円（前年同期比13.3%減）、経常利益が9億4千1百万円（前年同期比6.2%減）となり、親会社株主に帰属する当期純利益が7億9千5百万円（前年同期比12.7%減）となりました。

セグメントの業績は、次のとおりであります。

#### 〔高機能材料事業〕

スマートフォンなどの電子機器業界向け関連製商品の販売では、光学機器向けの新規顧客に対する販売が大きく増加したものの、スマートフォン向けの既存主要顧客に対する販売が、とりわけ下半期において、大きく落ち込んだため、関係するコーティング製品やフィルム表面加工製品並びに関連高機能フィルム商品といった差別化製商品の販売が減少しました。一方、自動車部品業界向け製商品の販売では、最大市場の中国で自動車の販売が減少に転ずる厳しい状況下にありましたが、当社の主要顧客の生産が総じて堅調に推移したこともあって、特に高機能樹脂製品の販売が増加しました。その結果、当事業全体の売上高は170億5千4百万円（前年同期比0.9%減）、営業利益は10億1千8百万円（前年同期比16.9%減）となりました。

#### （主な製商品群の概況）

製商品群	概況（数値は前年同期との対比）
コーティング製品	光学機器向け遮光部材製造用の新たなコーティング製品の販売は、大きく増加しましたが、スマートフォン向けでは、新機種端末の販売が低迷したため、当該機種向け電子部品製造用のコーティング製品の販売が、特に下半期において大きく減少し、また関連するフィルム表面加工製品の販売も減少したため、9.0%の減収となりました。
高機能樹脂製品	自動車部品業界向け電気絶縁用樹脂製品の販売は、厳しさを増す市場環境下ではありましたが、主要顧客向け販売が堅調に推移して増加し、また、電気・電子機器のセンサー用樹脂製品の販売も関係業界の安定した需要を背景に増加したため、9.8%の増収となりました。
電子材料	電子機器向け回路基板材料の販売は、自動車や産業機器向け用途などへの拡がりはあるものの、スマートフォン向け需要が特に下半期において、大きく減少したため販売が減少し、また、重電向け絶縁材料などの販売も前年同期並みに留まったことで、6.4%の減収となりました。
機能性樹脂	自動車向けなどの熱可塑性樹脂の販売は、若干増加しましたが、回路基板向けなどの熱硬化性樹脂や樹脂用添加剤の販売が、関係業界の需要低迷で減少したため、1.4%の減収となりました。

#### 〔環境材料事業〕

主要な販売先である製紙業界を中心に、当社グループの特長を生かした差別化製商品の拡販と新たな用途や周辺市場の開拓などに引き続き鋭意取り組んでまいりました。競合他社との厳しい競争が続く中、自社製品の販売では、とりわけ品質機能を向上させた製紙用ケミカルズ製品の販売が増加しました。また、仕入商品の販売では、紙塗工用バインダーが、原材料価格の上昇に伴う販売価格の引き上げや拡販の効果で増加し、製紙関連ケミカルズ商品が、拡販や新規商材の導入などで若干の増加となりました。その結果、当事業全体の売上高は46億6千8百万円（前年同期比10.3%増）、営業利益は1千7百万円（前年同期は営業損失1千7百万円）となりました。

(主な製商品群の概況)

製 商 品 群	概 況 (数 値 は 前 年 同 期 と の 対 比)
ファインケミカルズ	競合他社との厳しい競争下で、工業用殺菌剤の販売は減少しましたが、その他の製紙用ケミカルズ製品の販売では品質機能を向上させた製品の投入で販売が増加し、3.0%の増収となりました。
製紙用化学品	紙塗工用バインダーが値上げの浸透や拡販などで大きく増加し、また、製紙関連ケミカルズ商品も拡販や新規商材の導入で増加となり、12.3%の増収となりました。

[食品材料事業]

食品材料事業では、健康に優しく特長ある天然の食品素材を主要な取り扱い商品としており、的を絞った施策の下に、食品業界などへの拡販に鋭意注力してまいりました。これに加えて、これまでの営業活動で蓄積した食品に関わる様々な情報や技術を活用して、新規商材の発掘や市場の開拓、更には、独自性の発揮できる新規複合食品素材の開発といった新たなテーマにも積極的に取り組んでおります。当連結会計年度におきましては、とりわけ天然の増粘安定剤が、原産地の天候不順の影響から取引価格が大きく上昇したことや拡販の効果も加わって、販売が大きく増加しました。その結果、当事業全体の売上高は12億5千8百万円（前年同期比23.1%増）、営業利益は1億1千2百万円（前年同期比11.2%増）となりました。

(主な製商品群の概況)

製 商 品 群	概 況 (数 値 は 前 年 同 期 と の 対 比)
食 品 素 材 等	天然の増粘安定剤の販売は、原産地の天候不順の影響で取引価格が上昇したことや拡販の効果などで販売が大きく増加し、また、乾燥野菜の販売も若干増加したことで、全体では23.1%の増収となりました。

[その他の事業]

当社グループの持続的な成長を支える新たな事業領域を開発・育成すべく取り組んでいる「その他の事業」では、新たなビジネスチャンスの可能性を追求するため、市場開発用に新規商材などを導入し、試販等による事業化検討を行っております。当連結会計年度における「その他の事業」の売上高は6千6百万円（前年同期比21.8%増）、営業利益は6百万円（前年同期比24.2%増）となりました。

(2) 資本の財源及び資金の流動性に係る情報

当社グループは、主に営業活動によって得られるキャッシュ・フローの他、金融機関からの借入れによって資金を調達しております。また、営業活動、設備投資、借入金の返済等の資金需要に備えて、十分な資金を確保するために、資金調達及び資金の流動性の確保に努めております。

当連結会計年度末における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、前連結会計年度末と比較して4億1百万円減少して、42億4千万円となりました。

当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動によるキャッシュ・フローは、2億2千2百万円の資金増加（前連結会計年度は9億2千万円の資金増加）となりました。これは主に、税金等調整前当期純利益9億3千2百万円、減価償却費3億2千6百万円等の資金増加要因が、売上債権の増加額1億7千2百万円、たな卸資産の増加額4億1千7百万円、仕入債務の減少額1億7千7百万円、法人税等の支払額1億6千5百万円等の資金減少要因を上回ったことによるものであります。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動によるキャッシュ・フローは、4億7千8百万円の資金減少（前連結会計年度は2億5千万円の資金減少）となりました。これは主に、定期預金の預入による支出を10億2百万円、定期預金の払戻による収入を4億8千9百万円計上したことによるものであります。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動によるキャッシュ・フローは、9千8百万円の資金減少（前連結会計年度は6千2百万円の資金減少）となりました。これは主に、配当金の支払額9千6百万円によるものであります。

生産、受注及び販売の実績

(1) 生産実績

当連結会計年度の生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	前年同期比 (%)
高機能材料事業 (千円)	5,332,054	99.9
環境材料事業 (千円)	741,054	106.9
食品材料事業 (千円)	3,456	43.2
報告セグメント計 (千円)	6,076,565	100.7
その他の事業 (千円)	—	—
合計 (千円)	6,076,565	100.7

- (注) 1. 金額は製造原価によって表示しております。  
2. 上記金額には、消費税等は含まれておりません。

(2) 仕入実績

当連結会計年度の仕入実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	前年同期比 (%)
高機能材料事業 (千円)	8,362,815	97.9
環境材料事業 (千円)	3,598,856	110.3
食品材料事業 (千円)	1,185,927	128.9
報告セグメント計 (千円)	13,147,598	103.4
その他の事業 (千円)	48,868	135.8
合計 (千円)	13,196,467	103.4

- (注) 1. 金額は仕入原価によって表示しております。  
2. 上記金額には、消費税等は含まれておりません。

(3) 受注実績

当社グループは一部を除いて受注生産は行っておりません。

(4) 販売実績

当連結会計年度の販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	前年同期比 (%)
高機能材料事業 (千円)	17,054,459	99.1
環境材料事業 (千円)	4,668,853	110.3
食品材料事業 (千円)	1,258,769	123.1
報告セグメント計 (千円)	22,982,082	102.3
その他の事業 (千円)	66,009	121.8
合計 (千円)	23,048,092	102.4

- (注) 1. 上記金額には、消費税等は含まれておりません。



文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている企業会計の基準に準拠して作成しております。その作成には経営者による会計方針の選択・適用、資産・負債及び収益・費用の金額及び記載内容に影響を与える見積りを必要とします。経営者は、これらの見積りについて過去の実績等を勘案し合理的に判断しておりますが、実際の結果は、見積り特有の不確実性があるため、これらの見積りと異なる場合があります。

当社グループの連結財務諸表で採用する重要な会計方針は、「第5 経理の状況」において記載しておりますが、特に以下に記載する重要な会計方針が連結財務諸表における重要な見積りの判断に大きな影響を及ぼすと考えております。

① 有価証券の減損処理

当社は、金融機関や取引に関連する会社等の株式等を政策的に保有しておりますが、これらの有価証券は株式市場の変動リスクを負っています。当社は、合理的な評価基準に基づき有価証券の減損処理を実施しております。

② 貸倒引当金の計上基準

当社グループは、売上債権等の貸倒損失に備えて回収不能となる見積額を貸倒引当金として計上しております。

③ 退職給付債務について

当社は、従業員に対して確定給付型の退職給付制度を設けております。退職給付債務及び退職給付に係る負債並びに退職給付に係る資産の計算における年金資産については、割引率・長期期待運用収益率等各種比率に基づき合理的な基準による見積り計算を実施しております。

④ 繰延税金資産の回収可能性の評価

当社グループは、繰延税金資産の回収可能性を評価するに際して、将来の課税所得を合理的に見積り、繰延税金資産を計上しております。

(2) 当連結会計年度の経営成績の分析

当社グループの当連結会計年度の経営成績は、売上高は230億4千8百万円（前年同期比2.4%増）、営業利益は8億9千1百万円（前年同期比13.3%減）、経常利益は9億4千1百万円（前年同期比6.2%減）、親会社株主に帰属する当期純利益は7億9千5百万円（前年同期比12.7%減）となりました。

① 売上高の分析

当連結会計年度のわが国経済は、政府の継続した経済政策や日銀の金融緩和政策のもと、上半期では、景気は緩やかな回復基調を維持しましたが、下半期では、とりわけ米中貿易摩擦を中心とした米中間の対立や英国のEU離脱の問題、更には、中東・東アジアで継続する地政学リスクなどによって、世界経済の減速が鮮明となり、こうした背景から、わが国経済も下方局面への転換が徐々に進行して、先行き予断を許さない不安な影を投げかけております。

こうした状況下で当社グループは、原材料価格や物流費の値上げといった事業コストの上昇圧力が続く厳しい経営環境の中で、引き続き当社グループの特長を生かした事業運営とスピーディーな経営判断を心がけ、関係するグローバル市場での様々な変化やその影響を分析しながら、国内市場はもとより、中国・アジアの成長市場や米国及びその周辺市場など、幅広い関係市場で独自の差別化製商品の拡販と新規顧客の開拓に努め、更には、当社グループ全体の生産・物流の効率化などにも継続して取り組んでまいりました。

その結果、当連結会計年度の売上高は230億4千8百万円（前年同期比2.4%増）となりました。

② 販売費及び一般管理費の分析

当社グループ全体において、国内外の市場における販売が堅調に推移したことによる発送配達費の増加や取引仲先に対する販売手数料の発生等により、当連結会計年度の販売費及び一般管理費は30億7千7百万円（前年同期比3.4%増）となりました。

### ③ 営業外損益及び特別損益の分析

営業外収益は前連結会計年度から2千5百万円増加して1億5百万円（前年同期比31.6%増）となりました。これは主に、為替差益の計上や海外子会社における受取利息の増加によるものであります。また、営業外費用は前連結会計年度から4千8百万円減少して5千4百万円（前年同期比47.0%減）となりました。これは主に、前連結会計年度において、貸倒引当金繰入額や為替差損を計上していたことによるものであります。

特別利益は、前連結会計年度において固定資産売却益を計上しましたが、当連結会計年度では、当該事項は発生しておりません。また、特別損失は、前連結会計年度から8百万円増加して8百万円（前年同期比1,921.9%増）となりました。これは、当連結会計年度において、減損損失を計上したことによるものであります。

### (3) 経営成績に重要な影響を与える要因について

世界経済においては、とりわけ米中の貿易摩擦を中心とした米中間の対立やEU離脱の問題、更には、中東・東アジアで継続する地政学リスクなどによって、グローバル経済の縮小懸念と先行き不透明感が一段と増しており、こうした状況下における様々な変化が、為替の大きな変動なども伴って、当社グループの経営成績に大きな影響を及ぼすことが予想されます。

こうした予測の難しい経営環境の中で、当社グループは製造販売と仕入販売に係る営業活動に鋭意取り組んでおりますが、当社グループの関係市場や販売先では、競合各社間の競争が近年特に激化しており、そのため、当社グループの経営環境は益々厳しい状況が続いております。

製造販売におきましては、製品の販売先の動向や販売先が属する電子部品・自動車・製紙といった業界の動向、更には、各業界に占める販売先の位置づけなどが、当社グループの販売数量や販売価格に大きな影響を与える可能性があります。また、市場における競合各社間の競争激化を反映して、特にコーティング製品や高機能樹脂製品を中心に海外の廉価品の台頭などによって販売価格が下落したり、あるいは、原油価格の上昇などで原材料価格が上昇し製造コストが増加するといった要因により、当社グループの業績及び財政状態に悪影響を与える可能性があります。

仕入販売におきましては、製紙業界やIT関連業界、更には食品業界といった当社グループの販売先が関係する業界全体の動向に加え、当社グループの仕入先メーカーの生産供給体制と販売先の需要とのバランスが、販売数量及び販売価格に影響を与える可能性があります。また、競合他社による廉価販売や新商品の市場投入で既存の商流・商権が変化することなどにより、当社グループの販売数量の減少及び販売価格の下落を引き起こす可能性があります。

### (4) 戦略的現状と見通し

当社グループは、事業の重点化と他社との差別化を重要な戦略と位置づけて、引き続きグローバルな視野に立って将来的に成長が期待できる事業分野と市場へ、経営資源を重点的に集中させ、研究開発資源の有効かつ効率的な活用と「経営環境の変化に対するスピーディーな対応」で、ビジネスの強化と事業領域の拡大に努めてまいります。

具体的には、製造販売においては、とりわけ電子部品や自動車部品、更にはデジタル光学機器といった業界を中心に、コーティング製品や高機能樹脂製品の差別化戦略、付加価値の高い新規開発製品の市場投入などで拡販と事業領域の拡大を図り、また、仕入販売においては、特長ある既存商品群の物流・販売網強化と顧客ニーズに的確に応えるための仕入先との共同開発その他の協働、更には、新規商権の獲得などにも注力してまいります。

また、当社グループのグローバル展開では、アジア各地の当社子会社を拠点として、中国やタイ・ベトナム・インドを中心としたアジアの新興市場を事業活動のメインに据え、これに加えて、堅調な景気が続く米国やその周辺市場においても、生産・物流・販売の機能強化と更なる情報収集に努めてまいります。

### (5) 経営者の問題認識と今後の方針について

当社グループの経営陣は、最新の経営環境及び入手可能な情報に基づき最善の経営方針を立案すべく尽力しておりますが、米中の貿易摩擦を中心とした米中間の対立やEU離脱の問題、更には、継続する中東・東アジアにおける地政学リスクなどによって、世界経済の縮小懸念と先行き見通しの不透明感が増しており、当社グループの経営環境は一段と厳しい状況となっております。

当社グループとしましては、今後もこうした状況を正確かつ的確に把握してグループの総合力を効果的に発揮できるよう、引き続きコーポレート・ガバナンスの強化とスピーディーな経営判断を心がけ、業績の向上に努めていく方針であります。

(6) 経営方針・経営戦略、経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

経営方針・経営戦略、経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等については、「1 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等 (3) 経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等」に記載のとおり、達成目標は、売上高営業利益率4.0%、総資産経常利益率 (ROA) 5.0%、自己資本比率60.0%、海外地域売上比率20.0%であります。

当連結会計年度において、売上高営業利益率及び総資産経常利益率は、前連結会計年度を下回るとともに、達成目標には至りませんでした。これは、主に、主力のスマートフォン向けの既存主要顧客に対する関連製品の販売が落ち込み、草加事業所における工場稼働率の低下に伴う製造コストの上昇により、製品利益率が悪化したことによるものであります。一方で、自己資本比率及び海外地域売上比率は、前連結会計年度及び達成目標を上回りました。自己資本比率は、厳しい経営環境下で各種コスト低減等の諸施策に取り組み、利益の確保に努めたことで、利益剰余金の増加による純資産額が増加したものであり、海外地域売上比率は、日本国内の販売は減少したものの、海外子会社の事業活動は、中国・アジアの成長市場向け販売を中心に拡大基調が継続したことから、前連結会計年度及び達成目標を上回りました。

次年度以降は、引き続き、堅調な高機能材料事業における製品の販売を伸長させるとともに、新たな用途展開による製品販売の拡大を推進することで、工場の稼働率を高め、更なるコスト低減に取り組むことにより、当社グループ全体の収益基盤を確立させ、恒常的な目標達成に向け努めてまいります。

#### 4 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

#### 5 【研究開発活動】

当社グループでは、市場ニーズの変化に対する的確な対応や技術革新への新たな対応などを通して、事業の持続的な発展を図り、合わせて社会に貢献していくことを目的として、基盤技術開発分野とともに、高機能材料事業、環境材料事業及び食品材料事業の各分野において、積極的な研究開発活動を行っております。

当社グループがこれまで蓄積してきた技術資源やノウハウを基盤として、今後の成長が見込まれる分野に的を絞った市場開発や技術・製品開発、更には生産技術開発などに注力するとともに、これらを支える基盤技術の深耕や新たなビジネス開発のための基礎的研究にも努めております。

当連結会計年度の研究開発費の総額は340百万円となりました。

なお、事業セグメント別の研究の目的、主要課題、研究成果及び研究開発費は次のとおりであります。

##### (1) 基盤技術開発分野

基盤技術開発分野においては、高耐熱材料に関わる分子設計技術により、世界最高レベルの耐熱性、高透明性などの性能を有した画期的な溶媒可溶型ポリイミド樹脂の開発に成功して、サンプル出荷を開始し、ユーザーから高評価を得ております。また、加工性に優れたエポキシ接着シートや柔軟性と伸縮性に富んだ接着シートなどの開発も行っております。更に、バイオマテリアルに関する開発も成果が出始め、サンプル提供を開始しております。これら、新規技術により開発された製品を市場における評価を受けながら本格的な製品化に向けて取り組んでおります。

基盤技術開発分野における当連結会計年度の研究開発費は141百万円であります。

##### (2) 高機能材料事業

高機能材料事業の研究開発は、機能性フィルムに関連した研究開発と高機能樹脂に関連した研究開発とに大別されます。

機能性フィルムに関連した研究開発では、益々多様化・高度化する市場ニーズに応えるため、コーティングやラミネーション、フィルムの表面加工 (サンドマット加工やプラズマ加工処理) や粘接着樹脂の応用技術といった各種関連技術を複合的に駆使して製品開発を行っており、特に電子回路基板や微細電子部品の製造、光学機器や各種情報通信機器の製造といった分野で、当社の独自技術を活かした製品開発が進んでいます。実績として、電子部品製造工程で使用される特殊基材のメッキマスク用保護フィルムは、市場で高い評価を受け、最新のスマートフォン向け電子製品の製造でも採用されております。また、光学機能特性を高めた独自の遮光フィルムは、最新モデルのデジタル映像機器の付加価値を向上させる重要部材の一つとして位置づけられるに至りました。引き続き、市場ニーズに応える高付加価値製品や市場競争力を一段と高めた差別化製品などの更なる開発・育成に努めてまいります。

また、高機能樹脂に関連した研究開発では、自動車電装部品、小型モーター、その他の電気・電子部品などで使用される電気絶縁材料や防錆材料に関する高機能化のための研究開発や関連設備 (粉体塗装機的设计・製作) の開発を始めとして、各種電子機器の部品実装に関わる接着・封止樹脂の高機能化研究開発、更には、高熱伝導性接着剤、構造接着剤の研究開発、建築関連部材の防錆用塗料の開発なども行っております。

高機能材料事業における当連結会計年度の研究開発費は157百万円であります。

### (3) 環境材料事業

環境材料事業では、アクリルの合成技術と殺菌剤のブレンド技術をコア技術として、製紙分野をメインに、歩留・凝結剤、流動性改質剤、分散剤、殺菌剤他の製品開発に取り組んでいます。近年は従来の技術を更に進化させ、新規ポリマーの導入を軸に、他社と差別化できる製品を開発することができました。

また、既存製品を製紙業界以外にも横展開をすることで、製品の応用展開が可能となり、製品品質もアップすることができました。

加えて、製紙業界で培った技術をベースに、製品と商品とのコラボで、水処理分野への積極的技術開発を進めてきたことで、幅広い技術対応が可能となり、新規実績に結びつけております。

環境材料事業における当連結会計年度の研究開発費は12百万円であります。

### (4) 食品材料事業

食品材料事業では、加工食品、嚥下剤、とろみ剤、高カロリー食品（油脂含量の多い食品）等への使用を目的とした、増粘剤・ゲル化剤などの開発に取り組んでおります。低添加量で、味・風味を損なわず、食感を改善でき、温度変化にも影響を受けにくい増粘効果を発現させ、離水・離油を防止でき、一部ゼラチンの用途を代替できる増粘剤・ゲル化剤の開発に成功しました。様々な食品への用途提案を行い、本開発製品の本格販売に向け取り組んでおります。

食品材料事業における当連結会計年度の研究開発費は29百万円であります。

### 第3【設備の状況】

#### 1【設備投資等の概要】

当社グループでは、当連結会計年度において重要な設備投資は行っておりません。

なお、当連結会計年度において重要な設備の除却・売却等はありません。

#### 2【主要な設備の状況】

##### (1) 提出会社

2019年3月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額					従業員数 (人)
			建物及び 構築物 (千円)	機械装置 及び運搬具 (千円)	土地 (千円) (面積㎡)	その他 (千円)	合計 (千円)	
本社 (東京都中央区)	全ての事業 会社統括業務	統括業務施設 販売設備	7,408	4,428	—	14,543	26,380	72
草加事業所 (埼玉県草加市)	高機能材料事業 環境材料事業 食品材料事業	製品製造設備 研究開発設備	776,169	279,921	126,032 (39,991.18)	48,173	1,230,297	217
名古屋支店 (名古屋市中区)	高機能材料事業 環境材料事業	販売設備	1,250	—	—	221	1,472	10
大阪支店 (大阪市中央区)	高機能材料事業 環境材料事業 食品材料事業	販売設備	830	3,221	—	1,003	5,055	12
苫小牧営業所 (北海道苫小牧市)	高機能材料事業 環境材料事業	販売設備	593	494	—	34	1,122	3
仙台営業所 (仙台市青葉区)	高機能材料事業 環境材料事業	販売設備	—	1,927	—	443	2,370	2
日立営業所 (茨城県日立市)	高機能材料事業 環境材料事業	販売設備	328	18	—	52	399	4
福岡営業所 (福岡市博多区)	高機能材料事業 環境材料事業	販売設備	—	620	—	45	666	2
その他	全社共通	販売設備他	5,357	—	53,684 (852.12)	0	59,041	—
計	—	—	791,938	290,633	179,716 (40,843.3)	64,518	1,326,806	322

- (注) 1. 帳簿価額のうち「その他」は、工具、器具及び備品であり、建設仮勘定を含んでおりません。  
 2. 本社ビル (2,635.74㎡) 他、支店・営業所の建物 (計3,232.13㎡) を賃借しております。  
 3. 当社においては同一事業所で複数セグメントがある場合が多いため、セグメント別の分割表示は行っておりません。

(2) 国内子会社  
該当事項はありません。

(3) 在外子会社

2019年3月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額					従業員数 (人)
				建物及び 構築物 (千円)	機械装置 及び運搬具 (千円)	土地 (千円) (面積㎡)	その他 (千円)	合計 (千円)	
索馬龍(香港) 有限公司	(香港)	高機能材料 事業	販売設備	—	—	—	—	—	3
索馬龍精細化工 (珠海)有限公司	(中国広東省 ほか)	高機能材料 事業	販売設備 製品製造 設備	288,315	114,474	— (11,017)	22,729	425,519	51
台湾索馬龍股份 有限公司	(台湾新北市)	高機能材料 事業	販売設備 製品製造 設備	12,133	11,684	—	911	24,728	17
Siam Somar Co., Ltd.	(Bangkok, Thailandほか)	高機能材料 事業	販売設備 製品製造 設備	386,845	177,689	200,722 (24,000)	6,671	771,929	39
Somar Corporation India Pvt. Ltd.	(Karnataka, India)	高機能材料 事業	販売設備	—	109	—	94	204	3
Somar North America Corporation	(New York, U.S.A.)	高機能材料 事業	販売設備	—	2,801	—	669	3,470	3
計	—	—	—	687,294	306,758	200,722 (35,017)	31,076	1,225,852	116

- (注) 1. 帳簿価額のうち「その他」は、工具、器具及び備品であり、建設仮勘定を含んでおりません。  
2. 索馬龍精細化工(珠海)有限公司の土地は、土地使用権であり、無形固定資産の「その他」に78,376千円計上しており、帳簿価額は2018年12月31日(同社直近決算日)のものであります。  
3. 上記の他、事務所(計1,636.97㎡)を賃借しております。  
4. 12月決算の連結子会社については、2018年12月31日現在の金額、賃貸面積及び従業員数を記載しております。

### 3【設備の新設、除却等の計画】

当社グループの設備投資については、景気予測、業界動向、投資効率等を総合的に勘案して策定しております。設備計画は原則的に連結会社各社が個別に策定しておりますが、計画策定にあたっては提出会社を中心にグループ全体での調整を図っております。

なお、当連結会計年度末現在における重要な設備の新設、拡充、改修、除却、売却等の計画には、該当事項はありません。

## 第4【提出会社の状況】

### 1【株式等の状況】

#### (1)【株式の総数等】

##### ①【株式の総数】

種 類	発行可能株式総数 (株)
普通株式	6,000,000
計	6,000,000

##### ②【発行済株式】

種 類	事業年度末現在発行数 (株) (2019年3月31日)	提出日現在発行数 (株) (2019年6月26日)	上場金融商品取引所名又は登録認可金融商品取引業協会名	内 容
普通株式	1,958,734	1,958,734	東京証券取引所 (市場第二部)	単元株式数 100株
計	1,958,734	1,958,734	—	—

#### (2)【新株予約権等の状況】

##### ①【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

##### ②【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

##### ③【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

#### (3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

#### (4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年 月 日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減 額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金 増減額 (千円)	資本準備金 残高 (千円)
2016年6月28日 (注) 1	—	19,587	—	5,115,224	△412,329	4,473,939
2017年10月1日 (注) 2	△17,628	1,958	—	5,115,224	—	4,473,939

(注) 1. 会社法第448条第1項の規定に基づき、資本準備金を減少し、その他資本剰余金へ振替えたものであります。  
2. 2017年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行いました。これに伴い、発行済株式総数は17,628千株減少し、1,958千株となっております。

#### (5)【所有者別状況】

2019年3月31日現在

区分	株式の状況 (1単元の株式数 100株)							計	単元未満 株式の 状況(株)
	政府及び 地方 公共団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の 法人	外国法人等		個人その他		
					個人以外	個人			
株主数 (人)	—	8	20	45	26	2	1,538	1,639	—
所有株式数 (単元)	—	2,719	407	9,753	1,106	70	5,348	19,403	18,434
所有株式数の 割合 (%)	—	14.0	2.1	50.3	5.7	0.4	27.6	100	—

(注) 自己株式18,097株は「個人その他」欄に180単元及び「単元未満株式の状況」欄に97株含めて記載しております。

## (6) 【大株主の状況】

2019年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式 (自己株式を除く。)の総数に 対する所有株式 数の割合 (%)
株式会社ナガツタコーポレーション	東京都中央区銀座四丁目11番2号	480	24.8
多摩興産株式会社	東京都中央区銀座四丁目11番2号	237	12.3
株式会社宗屋	東京都中央区銀座四丁目11番2号	215	11.1
株式会社三井住友銀行	東京都千代田区丸の内一丁目1番2号	89	4.6
三菱UFJ信託銀行株式会社 (常任代理人 日本マスタートラスト信託 銀行株式会社)	東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 (東京都港区浜松町二丁目11番3号)	51	2.7
日本トラスティ・サービス信託銀行 株式会社 (信託口)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	49	2.6
株式会社三菱UFJ銀行	東京都千代田区丸の内二丁目7番1号	46	2.4
ソマール従業員持株会	東京都中央区銀座四丁目11番2号	30	1.6
BNY GCM CLIENT ACCOUNT JPRD AC ISG (FE-AC) (常任代理人 株式会社三菱UFJ銀行)	PETERBOROUGH COURT 133 FLEET STREET LONDON EC4A 2BB UNITED KINGDOM (東京都千代田区丸の内二丁目7番1号)	26	1.3
DBS BANK LTD. 700152 (常任代理人 株式会社みずほ銀行)	6 SHENTON WAY DBS BUILDING TOWER ONE SINGAPORE 068809 (東京都港区港南二丁目15番1号)	23	1.2
計	—	1,250	64.4

## (7) 【議決権の状況】

## ① 【発行済株式】

2019年3月31日現在

区 分	株式数 (株)	議決権の数 (個)	内 容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式 (自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式 (その他)	—	—	—
完全議決権株式 (自己株式等)	普通株式 18,000	—	単元株式数 100株
完全議決権株式 (その他)	普通株式 1,922,300	19,223	同上
単元未満株式	普通株式 18,434	—	一単元(100株)未満の株式
発行済株式総数	1,958,734	—	—
総株主の議決権	—	19,223	—



②【自己株式等】

2019年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数(株)	他人名義所有株式数(株)	所有株式数の合計(株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合(%)
ソマール株式会社	東京都中央区銀座 四丁目11番2号	18,000	—	18,000	0.9
計	—	18,000	—	18,000	0.9

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2)【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区 分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	550	1,348,020
当期間における取得自己株式(注)	172	329,076

(注)当期間における取得自己株式数には、2019年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

(4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区 分	当事業年度		当 期 間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他 ( — )	—	—	—	—
保有自己株式数(注)	18,097	—	18,269	—

(注)当期間における保有自己株式数には、2019年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

### 3 【配当政策】

当社は、継続的な企業価値の向上が最も重要な株主への利益配分であるとの方針から、キャッシュ・フローの創出による企業価値の増大に努めております。そして、株主に対する利益還元を最優先課題として継続的な安定配当を目指すとともに、事業から得られたキャッシュ・フローを、収益力向上のために企業体質の強化並びに積極的な事業拡大に優先的に配分しながら、1株当たり配当金が継続的に増加するよう努めてまいります。

当社は、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことを基本方針としております。

これらの剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会であり、中間配当については「取締役会の決議により、毎年9月30日を基準日として、中間配当を行うことができる。」旨を定款に定めております。

内部留保資金は、将来的に高い成長が見込まれるビジネスへの新規事業開発、生産性の向上などを目的とした設備投資及び研究開発投資並びに人材育成投資の原資とし、今後の事業展開に活用してまいります。

この基本方針に従い、当事業年度の配当につきましては、中間配当は見送らせていただきましたが、期末配当は当事業年度の業績結果を踏まえ、前事業年度と同配当の、1株当たり50円の配当を実施することを決定いたしました。

当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額 (千円)	1株当たり配当額 (円)
2019年6月26日 定時株主総会決議	97,031	50

### 4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

#### (1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

##### ・コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、商事機能とメーカー機能を併せた開発型企業として成長分野へ重点的な事業展開による事業活動を通じて、企業としての社会的な責任を果たしながら適正な利益を獲得し、継続的な企業価値（株主価値）の増大と安定的な配当を実現することが、株主をはじめとするステークホルダーに対する基本的な使命であると認識しております。

そして当社は、この基本的な使命を遂行するために、健全で透明性が高くかつ公正な経営体制を構築し、また監査役会及び社長直轄の組織である内部監査室の監視の下で、迅速な意思決定を行い、コンプライアンスを含めたコーポレート・ガバナンスの充実を図っております。

##### ・企業統治の体制

###### ① 会社の機関の内容及び内部統制システムの整備の状況

当社は、代表取締役社長 曾谷 太を議長とする取締役会を原則として毎月1回以上開催して、重要事項は全て付議し、業績の進捗につきましても議論し対策等を検討することで、公正で透明性の高い経営の実現を図っております。

経営環境の変化に迅速に対応するため、2001年6月に定款変更を行って取締役の任期を1年に短縮するとともに、2003年6月からは社外より公認会計士の取締役をむかえて、取締役会の機能強化と透明性の向上を図ってまいりました。更に、2015年6月には独立性を有する社外取締役2名を選任し、取締役会の機能強化に加えて、当社の持続的成長と中長期的な企業価値の向上に引き続き努めております。

経営上の法的な問題については、随時弁護士に確認をとり適法性に関するアドバイスを受ける体制を構築しております。会計監査人である有限責任監査法人トーマツからは、独立した第三者の立場から会計監査を受けております。

また、当社は従来から監査役制度を採用し、定期的に監査役会を開催しております。また、監査役3名のうち2名を社外監査役（両名ともに弁護士）としております。

補欠監査役（社外）を選任することで、法令に定める監査役の員数に欠員を生ずるという事態に迅速に対応できる体制を整備しております。

② 企業統治の体制を採用する理由

当社は、監査役制度を採用するとともに、社外取締役を2名選任しております。これにより、取締役会の透明性を高め、監督機能の強化を図ることで、取締役会の意思決定、決議に関する適正性、妥当性等が確保されているものと認識しております。

また、監査役会が社外監査役2名を含む3名で構成され、各監査役は取締役会他重要な会議体に参加する等、取締役の業務執行について厳正な監視を行うとともに、内部監査実施部門及び会計監査人と相互に連携を取り、経営の監視機能の面で十分に機能する体制を整えていることから、現体制において取締役会に対する監視・監督は十分に機能しているものと認識しているためであります。

更に、従前から取締役の任期を1年と規定することにより、重要なステークホルダーである株主が、取締役の業務執行及びその成果に対して直接的に毎年開催される定時株主総会において、信任の判断が行える体制であることも理由の一つであります。

③ リスク管理体制の整備の状況

認識された重要なリスクに対しては、その都度、取締役会を開催してその対応につき協議し、その結果に従い担当取締役をはじめ関連する全ての部署が、迅速かつ的確に対応する体制を整備しております。

④ 提出会社の子会社の業務の適正を確保するための体制整備の状況

当社グループ全体のコンプライアンス・ポリシーである「ソマールグループ企業行動憲章」を、グループの役員を含めた全員がいつでも閲覧できる体制を整備し、これの周知・徹底を図っております。

また、子会社管理に関わる関係規程を定めて、子会社の業務運営の適正性と透明性を図るとともに、当社に子会社の内部統制に関する担当部署を定め、子会社の内部統制に関する情報の共有化、指示・報告の伝達等が効果的かつ効率的に行われるシステムを含む体制を確立しております。

更に、当社の監査役は、当社の内部監査部門との連携を密にして子会社の情報収集に努め、必要な場合は子会社の取締役や監査役から適宜報告を行わせる体制を整備しております。

⑤ 責任限定契約の内容の概要

当社と社外取締役及び社外監査役は、会社法第427条第1項の規定により、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。ただし、当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は、法令が規定する額としております。

また、当社は、会社法第426条第1項の規定により、同法第423条第1項の取締役（取締役であった者を含む。）及び監査役（監査役であった者を含む。）の損害賠償責任を、法令の限度において、取締役会の決議によって免除することができる旨を、定款に定めております。

⑥ 取締役の定数

当社の取締役は20名以内とする旨定款に定めております。

⑦ 取締役の選任及び解任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。

また、取締役の選任決議は、累積投票によらないものとする旨定款に定めております。

⑧ 自己株式の取得の決定機関

当社は、市場取引等による自己株式の取得について会社法第165条第2項に定める事項については、株主総会の決議によらず取締役会の決議によって自己の株式を取得することができる旨定款に定めております。これは、自己株式の取得を取締役会の権限とすることにより、機動的な資本政策を行うことで、資本効率の向上や株主価値の向上等を実現することを目的とするものであります。

⑨ 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

⑩ 中間配当

当社は、株主への機動的な利益還元を行うため、会社法第454条第5項の規定により、取締役会の決議によって毎年9月30日を基準日として、中間配当を行うことができる旨定款に定めております。

⑪ 取締役及び監査役の責任免除

当社は、会社法第426条第1項の規定により、同法第423条第1項の取締役（取締役であった者を含む。）及び監査役（監査役であった者を含む。）の損害賠償責任を、法令の限度において、取締役会の決議によって免除することができる旨定款に定めております。これは、取締役及び監査役が職務を遂行するにあたり、その能力を十分に発揮して、期待される役割を果たしうる環境を整備することを目的とするものであります。

## (2) 【役員の状況】

## ① 役員一覧

男性 9名 女性 0名 (役員のうち女性の比率 0%)

役 職 名	氏 名	生年月日	略 歴	任期	所有株式数 (千株)
代表取締役社長	曾谷 太	1973年 6月 8日生	2001年10月 有限責任監査法人トーマツ入所 2005年 4月 株式会社宗屋 取締役 2005年 4月 多摩興産株式会社 取締役(現任) 2005年 6月 当社取締役 2008年 4月 常務取締役 2008年 7月 代表取締役専務取締役 2008年 9月 代表取締役副社長 2011年 4月 代表取締役社長(現任)	(注)3	10.6
取締役	鶴田 和久	1960年10月 2日生	2008年 1月 当社入社 2012年 2月 索馬龍(香港)有限公司 代表取締役社長(現任) 2012年 2月 索馬龍精細化工(珠海)有限公司 董事長(現任) 2012年 4月 理事 2013年 9月 Siam Somar Co., Ltd. 代表取締役社長(現任) 2014年 6月 取締役(現任)	(注)3	1.6
取締役	川野 崇之	1960年 3月 1日生	1985年 4月 当社入社 2005年 4月 高機能樹脂本部 技術開発部長 2006年 6月 取締役(現任) 2014年 1月 Somar Corporation India Pvt. Ltd. 代表取締役社長 2017年 4月 Somar North America Corporation 代表取締役社長(現任)	(注)3	0.9
取締役	三村 撰	1963年 7月13日生	1989年10月 有限責任監査法人トーマツ入所 1993年 4月 公認会計士登録 1998年 8月 三村会計事務所入所(現任) 2003年 6月 当社取締役(現任) 2016年 6月 株式会社ネクストジェン 社外取締役(現任)	(注)3	5.1
取締役	坂本 昇	1978年 6月13日生	2007年 4月 雪ヶ谷化学工業株式会社入社 2011年 8月 有魁隆(上海)橡塑製品有限公司 董事長・総経理(現任) 2013年 4月 雪ヶ谷化学工業株式会社 代表取締役社長(現任) 2015年 6月 当社取締役(現任)	(注)3	1.8
取締役	春日 孝之	1977年 6月30日生	2008年 6月 株式会社日本機材 (現NiKKi Fron株式会社)入社 2014年 4月 株式会社ニッキフロン・トレーディ ング 代表取締役社長(現任) 2015年 6月 NiKKi Fron株式会社 代表取締役社長(現任) 2015年 6月 当社取締役(現任)	(注)3	0.5
常勤監査役	山崎 亨	1964年 8月13日生	2013年10月 当社入社 2014年 4月 営業本部 高機能材料部 部長 2014年 4月 台湾索馬龍股份有限公司 董事長 2015年12月 経営戦略室 室長 2019年 4月 台湾索馬龍股份有限公司 監査役(現任) 2019年 6月 当社監査役(現任)	(注)4	0.5

役 職 名	氏 名	生年月日	略 歴	任期	所有株式数 (千株)
監査役	亀山 晴信	1959年 5月15日生	1992年 4月 弁護士登録（第一東京弁護士会） 1997年 4月 亀山晴信法律事務所 （現 亀山総合法律事務所）開設 2007年 6月 株式会社小森コーポレーション 監査役 2010年 4月 東京簡易裁判所民事調停委員（現任） 2012年10月 株式会社東光高岳 社外取締役（現任） 2013年 6月 株式会社小森コーポレーション 社外取締役（現任） 2013年10月 当社監査役（現任）	(注)4	-
監査役	中島 玲史	1982年 6月18日生	2009年12月 弁護士登録（東京弁護士会） 第一中央法律事務所入所（現任） 2018年 7月 特定非営利活動法人国際環境・ エネルギー問題研究会 監事（現任） 2019年 6月 当社監査役（現任）	(注)4	-
計					21.0

- (注) 1. 取締役坂本昇、春日孝之の2氏は、社外役員（会社法施行規則第2条第3項第5号）に該当する社外取締役（会社法第2条第15号）であります。
2. 監査役亀山晴信、中島玲史の2氏は、社外役員（会社法施行規則第2条第3項第5号）に該当する社外監査役（会社法第2条第16号）であります。
3. 2019年6月26日開催の定時株主総会の終結の時から1年間であります。
4. 2019年6月26日開催の定時株主総会の終結の時から4年間であります。
5. 当社は、法令に定める監査役員の員数を欠くことになる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠監査役1名を選任しております。

補欠監査役の略歴は次のとおりであります。

氏 名	生年月日	略 歴	所有株式数 (千株)
三浦 恵美	1982年 1月 2日生	2008年12月 弁護士登録（東京弁護士会） 東京あさひ法律事務所入所（現任） 2016年 9月 東京地方裁判所民事調停官 非常勤裁判官（現任）	-

## ② 社外役員の状況

当社の社外取締役は2名、社外監査役は2名であります。

社外取締役坂本昇氏は、企業経営における豊富な経験や実績を活かし、その幅広い見識を当社の経営に反映していただくことを目的として、社外取締役として選任しております。また、同氏を株式会社東京証券取引所の定めに基づく独立役員として指定し、同取引所に届け出ております。なお、当社と同氏の間には、人的関係、資本的関係及び重要な取引関係その他の利害関係はありません。

社外取締役春日孝之氏は、企業経営における豊富な経験や実績を活かし、その幅広い見識を当社の経営に反映していただくことを目的として、社外取締役として選任しております。また、同氏を株式会社東京証券取引所の定めに基づく独立役員として指定し、同取引所に届け出ております。なお、当社と同氏の間には、人的関係、資本的関係及び重要な取引関係その他の利害関係はありません。

社外監査役亀山晴信氏は、法律の専門家としての知見及び経験を活かし、公正・中立な独立した立場から、当社の内部監査の充実及び取締役会の監督機能の強化を図ることを目的として、社外監査役として選任しております。なお、当社と同氏の間には、人的関係、資本的関係及び重要な取引関係その他の利害関係はありません。

社外監査役中島玲史氏は、法律の専門家としての知見及び経験を活かし、公正・中立な独立した立場から、当社の内部監査の充実及び取締役会の監督機能の強化を図ることを目的として、社外監査役として選任しております。また、同氏を株式会社東京証券取引所の定めに基づく独立役員として指定し、同取引所に届け出ております。なお、当社と同氏の間には、人的関係、資本的関係及び重要な取引関係その他の利害関係はありません。

当社は、社外取締役及び社外監査役を選任するための独立性の基準を定めており、過去3年において当社の主要な取引先や主要銀行あるいは主要な株主の業務執行者であった者、又は当社グループから一定額以上の金銭等を受けている社外専門家、あるいは当社又は当社子会社の業務執行者であったことがある者等は独立性を有しないと判断しております。当社の社外取締役及び社外監査役はいずれもこれらに該当せず、一般株主と利益相反するおそれがないと判断しております。

③ 社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

・代表取締役との定期会合

社外監査役は代表取締役と定期的に会合を持ち、内部統制の体制及び監査結果等を含め、経営上の重要課題について意見交換し、認識の共有に努めております。

・会計監査人との協議等

社外監査役は会計監査人と定期的に、また、必要に応じて会合を持ち、監査計画並びに監査結果の説明を受け、意見及び情報の交換を行っております。

・内部監査部門との連携

社外監査役は内部監査結果の報告に基づき、意見及び情報の交換を行っており、必要に応じて内部監査部門に対し調査を求める等、効率的な監査の実施に努めております。

(3) 【監査の状況】

① 監査役監査の状況

監査役会は、常勤監査役1名及び社外監査役2名の計3名で構成され、各監査役は監査役会が策定した監査計画に基づき監査を行っております。また、各監査役は取締役会他重要な会議体に出席する等、取締役の業務執行について厳正な監視を行うとともに、内部監査室及び会計監査人と相互に連携を取り、監査の実効性の向上と効率を図っております。

当事業年度において監査役会を14回開催しており、個々の監査役の出席状況については、下記のとおりです。

川島 征夫…14回、宍戸 金二郎…14回、亀山 晴信…14回

② 内部監査の状況等

内部監査については、社長直轄の組織である内部監査室（3名）を設置し、内部監査室が期初において監査役会との調整のもとで監査計画を策定し、この監査計画に基づき、各部署の業務執行状況について適法性・妥当性・効率性等、内部統制に係る監査を実施しており、その結果を代表取締役社長に報告するとともに、監査役会にも報告し、更に、監査役は適時オブザーバーとして内部監査に同席して、相互連携を図っております。

③ 会計監査の状況

当社は、会社法監査と金融商品取引法に基づく会計監査について有限責任監査法人トーマツに依頼しておりますが、同監査法人及び当社監査に従事する同監査法人の業務執行社員と当社の間には、特別の利害関係はありません。

当社は同監査法人との間で、会社法監査と金融商品取引法監査について、監査及び四半期レビュー契約書を締結し、それに基づき報酬を支払っております。当事業年度において業務を執行した公認会計士の氏名、監査業務に係る補助者の構成については下記のとおりです。

監査法人の名称 有限責任監査法人トーマツ

継続監査期間 23年間

業務を執行した公認会計士の氏名

指定有限責任社員 業務執行社員 : 飯野 健一、大竹 貴也

会計監査業務に係る補助者の構成

公認会計士 5名、その他 6名

・会計監査人の選定方針、選定理由及び評価

当社の監査役及び監査役会は、「会計監査人の評価及び選定基準策定に関する監査役等の実務指針」を踏まえ、会計監査人が独立性及び必要な専門性を有すること、監査体制が整備されていること、当社の業務内容に対応して効率的な監査業務を実施できるネットワークを有すること、監査範囲及び監査スケジュール等具体的な監査計画並びに監査費用が合理的かつ妥当であること等を総合的に評価し、会計監査人を選定しております。

また、解任・不再任につきましては、「会計監査人の解任又は不再任の決定の方針」を策定し、現任の会計監査人の適切性・妥当性を評価し、再任の適否についての判断を行っております。

当社の監査役及び監査役会は、上記事項に基づき会計監査人の評価を実施し、有限責任監査法人トーマツは当社の会計監査人として適任であると判断いたしました。

なお、会計監査人において、業務停止処分等に該当する事項は生じておりません。

・ 監査報酬の内容等

「企業内容等の開示に関する内閣府令の一部を改正する内閣府令」（平成31年1月31日内閣府令第3号）による改正後の「企業内容等の開示に関する内閣府令」第二号様式記載上の注意(56) d (f) i から iii の規定に経過措置を適用しております。

監査公認会計士等に対する報酬の内容

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬 (千円)	非監査業務に基づく報酬 (千円)	監査証明業務に基づく報酬 (千円)	非監査業務に基づく報酬 (千円)
提出会社	30,000	—	30,000	—
連結子会社	—	—	—	—
計	30,000	—	30,000	—

その他重要な報酬の内容

(前連結会計年度)

当社グループは、連結決算の早期化及び信頼性確保のために、原則として海外連結子会社の監査業務を当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属しているデロイト トウシュ トーマツに統一することとしております。

当連結会計年度において、海外連結子会社である索馬龍（香港）有限公司、索馬龍精細化工（珠海）有限公司、及び台湾索馬龍股份有限公司は、デロイト トウシュ トーマツのメンバーファームと監査契約を締結しております。契約金額は、総額で6,696千円であります。

(当連結会計年度)

当社グループは、連結決算の早期化及び信頼性確保のために、原則として海外連結子会社の監査業務を当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属しているデロイト トウシュ トーマツに統一することとしております。

当連結会計年度において、海外連結子会社である索馬龍（香港）有限公司、索馬龍精細化工（珠海）有限公司、及び台湾索馬龍股份有限公司は、デロイト トウシュ トーマツのメンバーファームと監査契約を締結しております。契約金額は、総額で6,603千円であります。

監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容

(前連結会計年度)

該当事項はありません。

(当連結会計年度)

該当事項はありません。

監査報酬の決定方針

当社は、監査日数等を勘案し、監査公認会計士等に対する監査報酬額を決定しております。

監査役会が監査報酬に同意した理由

監査役会は、過年度の監査計画と実績の状況並びに監査時間及び監査報酬額の推移を確認した上で、取締役、社内関係部門及び会計監査人から必要な資料や情報を入手し、当該事業年度の会計監査人の監査計画の内容、監査予定時間及び報酬額の見積りの妥当性等を検討した結果、会計監査人の報酬等につき、会社法第399条第1項及び第2項の同意を行っております。

(4) 【役員の報酬等】

当社の取締役及び監査役の報酬等の額は、それぞれの報酬限度額が株主総会で、決議されております。

取締役（社外取締役を除く）の報酬等の額は、固定報酬である毎月の定期同額報酬と、年1回の業績連動報酬から構成され、業務執行に関与しない社外取締役及び監査役の報酬等の額は、固定報酬である毎月の定期同額報酬のみで構成されております。



## ① 報酬プログラム

### ・報酬の決定に関する方針

当社の「役員の報酬等」は、会社法及び当社定款の定めに従い、取締役及び監査役の報酬限度額を株主総会で決議いたします。各取締役の報酬等の額は取締役会で、各監査役の報酬等の額は監査役の協議により決定いたします。なお、報酬等の細目については、取締役会で定めた「役員の報酬等の内規」で規定しております。

### ・役員報酬に係る株主総会決議

イ. 取締役の報酬限度額 年額290百万円（但し、使用人分給与は含まず。）

第36回定時株主総会（1984年3月30日開催）決議

定款に定める取締役の員数：20名以内

ロ. 監査役の報酬限度額 年額45百万円

第36回定時株主総会（1985年3月30日開催）決議

定款に定める監査役の員数：5名以内

### ・定期同額報酬の決定に関する基準

イ. 取締役（社外取締役を除く）

日本企業の役員報酬の水準を参考に、原則として、当社従業員の給与の最高額を基準とし、役位ごとに決定する。

ロ. 常勤監査役

取締役（社外取締役を除く）の定期同額報酬を参考に決定する。

ハ. 社外取締役（その他の非常勤取締役を含む）及び社外監査役

会社への貢献度、社会的地位、就任の事情等を総合的に考慮し決定する。

### ・定期同額報酬の決定方法

イ. 取締役

原則として、定時株主総会終了後最初に開催される取締役会において決定する。なお、取締役会がその決定を代表取締役社長へ一任した場合は、代表取締役社長が決定する。

ロ. 監査役

原則として、定時株主総会終了後最初に開催される監査役会において、監査役の協議により決定する。

ハ. 定期同額報酬の減額

取締役及び監査役の定期同額報酬は、会社の業績等により必要に応じて臨時に減額することがある。

### ・当事業年度に係る報酬額の決定過程における取締役会の活動内容

各取締役の定期同額報酬は、2018年6月27日開催の第71回定時株主総会終了後、同日開催された取締役会で関係議案が付議され、その額の決定は代表取締役社長に一任されました。

・業績連動報酬の決定に関する基準

業績連動報酬は連結経常利益を指標としており、その支給総額及び各取締役への配分方法は下記のとおり定めております。連結経常利益を指標としている理由は、業務執行に携わる取締役の功績・責任を最も客観的にかつ適切に評価できる指標であると判断していることに基づくものであります。

イ. 業績連動報酬の支給総額

- 連結経常利益が11億円未満の場合・・・・・・・・・・支給しない。
- 連結経常利益が11億円以上12億円未満の場合・・・・ 10百万円
- 連結経常利益が12億円以上13億円未満の場合・・・・ 20百万円
- 連結経常利益が13億円以上14億円未満の場合・・・・ 30百万円
- 連結経常利益が14億円以上15億円未満の場合・・・・ 40百万円
- 連結経常利益が15億円以上16億円未満の場合・・・・ 50百万円
- 連結経常利益が16億円以上17億円未満の場合・・・・ 60百万円
- 連結経常利益が17億円以上18億円未満の場合・・・・ 70百万円
- 連結経常利益が18億円以上19億円未満の場合・・・・ 80百万円
- 連結経常利益が19億円以上20億円未満の場合・・・・ 90百万円
- 連結経常利益が20億円以上の場合・・・・・・・・・・ 100百万円

ロ. 業績連動報酬の各取締役への配分方法

役位毎のポイントを定め、支給取締役の総ポイント額に定める各取締役のポイントの構成に応じて、配分する。役位毎のポイントは次のとおりとする。

役位	ポイント
社長	64
副社長	45
専務取締役	39
常務取締役	33
取締役	28

ハ. 前項で定める取締役の各役位は前事業年度にかかる定時株主総会終結後に開催する取締役会で選任された役位とし、その後の昇格又は降格があった場合でも配分は変更しない。

・業績連動報酬の決定方法

当該期の終了後、翌期の期首から3ヶ月を経過する日までに、監査役の過半数が当該算定方法につき適正であると認められる旨を記載した書面を代表取締役社長へ提出した上で、取締役会で決定いたします。

・業績連動報酬とそれ以外の報酬の支給割合の決定に関する方針

支給割合の決定に関する方針は特に定めておりません。なお、業績連動報酬の支給総額の上限は100百万円と定めており、この額は、取締役の年度報酬限度額290百万円の34.5%に相当します。

② 報酬実績と業績との関連性

・役員区分ごとの報酬総額及び報酬の種類別総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額 (千円)				対象となる 役員の員数 (人)
		固定報酬	業績連動報酬	ストック オプション	退職慰労金	
取締役 (社外取締役を除く。)	52,252	52,252	—	—	—	4
監査役 (社外監査役を除く。)	11,400	11,400	—	—	—	1
社外役員	16,800	16,800	—	—	—	4

- ・ 使用人兼務役員の使用人分給与のうち重要なもの  
該当する事項はありません。
- ・ 連結報酬総額が1億円以上である役員の個別報酬開示  
報酬等の総額が1億円以上である役員が存在しないため、該当する事項はありません。
- ・ 当事業年度の業績連動報酬に係る指標の目標、実績  
業績連動報酬の支給条件…連結経常利益11億円以上  
年度当初の業績予想数値…連結経常利益7.9億円  
当事業年度の指標の実績…連結経常利益9.4億円

当事業年度の業績連動報酬に係る指標の実績は、年度当初の業績予想数値は上回ったものの、業績連動報酬の支給条件には満たなかったため、当事業年度の業績に基づく業績連動報酬の支給はありません。

(5) 【株式の保有状況】

① 投資株式の区分の基準及び考え方

当社の投資株式は、事業活動における有用性を十分考慮したうえで、保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式になります。なお、純投資目的である投資株式は原則保有しない考えであります。

② 保有目的が純投資以外の目的である投資株式

a. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証内容

当社は、業務提携や取引の維持・強化といった事業活動上の必要性等を総合的に勘案し、当社の企業価値向上のための中長期的な視点に立って、株式を保有しております。

保有の合理性の検証並びに個別銘柄の保有の適否に関する具体的な検証結果については、秘密保持等の観点から記載することができませんが、全ての保有株式の銘柄ごとに、毎年の取締役会において、当社を取り巻く事業環境の変化や保有先との関係等を鑑み、株式の継続保有が妥当であるかを確認するとともに、当該保有先の年間取引高等を基準として、株式保有に関わる経済的合理性を検証し、継続保有の適否を判断しております。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額 (千円)
非上場株式	4	106
非上場株式以外の株式	29	1,633,935

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額 (千円)	株式数の増加の理由
非上場株式	—	—	—
非上場株式以外の株式	3	3,983	持株会株式保有による定期的な株式の購入による増加

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額 (千円)
非上場株式	—	—
非上場株式以外の株式	—	—

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報  
 特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の 株式の 保有の 有無
	株式数 (株)	株式数 (株)		
	貸借対照表計上額 (千円)	貸借対照表計上額 (千円)		
NOK(株)	200,000	200,000	当社グループの営業活動のより円滑な推進のため	有
	344,600	413,200		
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	372,450	372,450	財務・経理・総務に係る業務のより円滑な推進のため	有
	204,847	259,597		
(株)三井住友フィナンシャルグループ	44,305	44,305	財務・経理・総務に係る業務のより円滑な推進のため	有
	171,726	197,511		
日立化成(株)	56,659	56,659	当社グループの営業活動のより円滑な推進のため	無
	138,927	137,398		
(株)大泉製作所	180,000	180,000	当社グループの営業活動のより円滑な推進のため	無
	109,260	152,280		
旭化成(株)	80,000	80,000	当社グループの営業活動のより円滑な推進のため	無
	91,360	111,920		
北越コーポレーション(株)	137,112	134,904	当社グループの営業活動のより円滑な推進を図ることを目的として、持株会株式保有による定期的な株式の購入を行っているため	無
	88,711	92,544		
(株)日立製作所	24,200	121,000	当社グループの営業活動のより円滑な推進のため	無
	86,757	93,266		
三菱電機(株)	50,000	50,000	当社グループの営業活動のより円滑な推進のため	無
	71,125	85,075		
日本製紙(株)	30,335	30,335	当社グループの営業活動のより円滑な推進のため	無
	69,345	60,245		
レンゴー(株)	60,981	60,981	当社グループの営業活動のより円滑な推進のため	無
	63,298	56,041		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の 株式の 保有の 有無
	株式数 (株)	株式数 (株)		
	貸借対照表計上額 (千円)	貸借対照表計上額 (千円)		
(株)みずほフィナンシャル グループ	186,980	186,980	財務・経理・総務に係る業務のより 円滑な推進のため	無
	32,029	35,787		
王子ホールディングス(株)	46,611	46,611	当社グループの営業活動のより円滑 な推進のため	無
	32,021	31,881		
(株)めぶきフィナンシャル グループ	101,035	101,035	財務・経理・総務に係る業務のより 円滑な推進のため	有
	28,592	41,323		
藤森工業(株)	8,800	8,800	当社グループの営業活動のより円滑 な推進のため	有
	26,752	33,132		
イビデン(株)	7,800	6,931	当社グループの営業活動のより円滑 な推進を図ることを目的として、持 株会株式保有による定期的な株式の 購入を行っているため	無
	13,121	10,971		
(株)りそなホールディングス	16,273	16,273	財務・経理・総務に係る業務のより 円滑な推進のため	有
	7,806	9,145		
(株)七十七銀行	5,000	5,000	財務・経理・総務に係る業務のより 円滑な推進のため	無
	7,735	12,525		
第一工業製薬(株)	2,000	10,000	当社グループの営業活動のより円滑 な推進のため	無
	6,960	8,750		
(株)寺岡製作所	13,310	13,310	当社グループの営業活動のより円滑 な推進のため	有
	6,907	8,957		
太陽化学(株)	3,630	3,630	当社グループの営業活動のより円滑 な推進のため	無
	5,662	6,370		
太陽誘電(株)	2,532	1,990	当社グループの営業活動のより円滑 な推進を図ることを目的として、 持株会株式保有による定期的な株式 の購入を行っているため	無
	5,513	3,589		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の 株式の 保有の 有無
	株式数 (株)	株式数 (株)		
	貸借対照表計上額 (千円)	貸借対照表計上額 (千円)		
三菱製紙(株)	9,557	9,557	当社グループの営業活動のより円滑 な推進のため	無
	5,313	6,259		
理研ビタミン(株)	1,000	1,000	当社グループの営業活動のより円滑 な推進のため	無
	3,510	4,120		
京セラ(株)	508	508	当社グループの営業活動のより円滑 な推進のため	無
	3,302	3,050		
東武鉄道(株)	1,000	1,000	当社グループの営業活動のより円滑 な推進のため	無
	3,195	3,205		
日立金属(株)	2,000	2,000	当社グループの営業活動のより円滑 な推進のため	無
	2,572	2,516		
ANAホールディングス(株)	400	400	当社グループの営業活動のより円滑 な推進のため	無
	1,623	1,647		
大王製紙(株)	1,000	1,000	当社グループの営業活動のより円滑 な推進のため	無
	1,357	1,500		

(注) 上記のうち上位11銘柄は、貸借対照表計上額が当社資本金額の1%を超えております。

また、保有する特定投資株式数が60銘柄に満たないため、全29銘柄について記載しております。

みなし保有株式

みなし保有株式は保有していません。

- ③ 保有目的が純投資目的である投資株式  
純投資目的で保有する投資株式はありません。
- ④ 当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したもの  
該当事項はありません。
- ⑤ 当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したもの  
該当事項はありません。

## 第5【経理の状況】

### 1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に基づいて作成しております。

なお、当連結会計年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の連結財務諸表に含まれる比較情報のうち、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則等の一部を改正する内閣府令」（平成30年3月23日内閣府令第7号。以下「改正府令」という。）による改正後の連結財務諸表規則第15条の5第2項第2号及び同条第3項に係るものについては、改正府令附則第3条第2項により、改正前の連結財務諸表規則に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。）に基づいて作成しております。

なお、当事業年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の財務諸表に含まれる比較情報のうち、改正府令による改正後の財務諸表等規則第8条の12第2項第2号及び同条第3項に係るものについては、改正府令附則第2条第2項により、改正前の財務諸表等規則に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

### 2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の連結財務諸表及び事業年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の財務諸表について、有限責任監査法人トーマツによる監査を受けております。

### 3. 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更等についての確に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入しております。

## 1 【連結財務諸表等】

## (1) 【連結財務諸表】

## ① 【連結貸借対照表】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	4,641,484	4,739,528
受取手形及び売掛金	5,330,450	5,272,329
電子記録債権	1,703,741	1,894,393
たな卸資産	※1 2,246,687	※1 2,649,314
その他	229,923	260,794
貸倒引当金	△35,680	△45,598
流動資産合計	14,116,607	14,770,762
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	8,096,172	8,023,454
減価償却累計額	△6,492,878	△6,544,221
建物及び構築物（純額）	※3 1,603,294	※3 1,479,232
機械装置及び運搬具	7,891,860	7,899,642
減価償却累計額	△7,206,789	△7,302,250
機械装置及び運搬具（純額）	685,071	597,391
土地	※3 383,310	※3 380,439
建設仮勘定	4,297	105,497
その他	1,518,576	1,516,962
減価償却累計額	△1,450,451	△1,421,367
その他（純額）	68,124	95,594
有形固定資産合計	2,744,097	2,658,156
無形固定資産		
ソフトウェア	10,544	5,638
その他	90,909	82,819
無形固定資産合計	101,454	88,457
投資その他の資産		
投資有価証券	※3 1,896,746	※2, ※3 1,733,084
長期貸付金	17,684	17,683
退職給付に係る資産	104,584	159,744
繰延税金資産	13,903	8,150
差入保証金	1,367,541	1,087,790
その他	510,402	507,089
貸倒引当金	△481,951	△481,914
投資その他の資産合計	3,428,911	3,031,627
固定資産合計	6,274,463	5,778,241
資産合計	20,391,070	20,549,004



(単位：千円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
<b>負債の部</b>		
流動負債		
支払手形及び買掛金	※3 3,762,522	※3 3,564,531
1年内返済予定の長期借入金	—	※3 3,500,000
未払法人税等	127,735	48,385
賞与引当金	158,056	128,464
その他	604,713	671,647
流動負債合計	4,653,028	7,913,028
固定負債		
長期借入金	※3 3,500,000	—
資産除去債務	61,702	61,920
繰延税金負債	39,876	22,436
その他	49,481	54,439
固定負債合計	3,651,060	138,796
負債合計	8,304,089	8,051,824
純資産の部		
株主資本		
資本金	5,115,224	5,115,224
資本剰余金	4,473,939	4,473,939
利益剰余金	1,069,951	1,768,633
自己株式	△54,637	△55,985
株主資本合計	10,604,477	11,301,812
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	601,516	441,829
繰延ヘッジ損益	△3,923	△2,234
為替換算調整勘定	1,050,347	903,959
退職給付に係る調整累計額	△165,436	△148,187
その他の包括利益累計額合計	1,482,503	1,195,367
純資産合計	12,086,980	12,497,179
負債純資産合計	20,391,070	20,549,004

## ②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

## 【連結損益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上高	22,514,514	23,048,092
売上原価	※1,※5 18,511,560	※1,※5 19,079,514
売上総利益	4,002,954	3,968,577
販売費及び一般管理費	※2,※5 2,975,466	※2,※5 3,077,575
営業利益	1,027,487	891,001
営業外収益		
受取利息	13,831	16,759
受取配当金	41,828	44,409
為替差益	—	6,878
受取賃貸料	10,729	10,613
その他	13,695	26,706
営業外収益合計	80,085	105,367
営業外費用		
支払利息	31,437	31,438
貸倒引当金繰入額	35,582	—
債権売却損	2,908	3,011
為替差損	22,289	—
固定資産除却損	6,770	11,202
支払補償費	172	6,954
その他	4,012	2,042
営業外費用合計	103,173	54,649
経常利益	1,004,399	941,720
特別利益		
固定資産売却益	※3 1,762	—
特別利益合計	1,762	—
特別損失		
固定資産売却損	※4 375	—
投資有価証券評価損	63	—
減損損失	—	※6 8,892
特別損失合計	439	8,892
税金等調整前当期純利益	1,005,722	932,827
法人税、住民税及び事業税	138,982	88,428
法人税等調整額	△45,146	48,657
法人税等合計	93,835	137,086
当期純利益	911,887	795,741
親会社株主に帰属する当期純利益	911,887	795,741

## 【連結包括利益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
当期純利益	911,887	795,741
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	△2,908	△159,686
繰延ヘッジ損益	△3,521	1,688
為替換算調整勘定	118,803	△146,387
退職給付に係る調整額	△13,335	17,249
その他の包括利益合計	※ 99,037	※ △287,135
包括利益	1,010,924	508,606
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	1,010,924	508,606
非支配株主に係る包括利益	—	—

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	5,115,224	4,473,939	216,343	△49,922	9,755,585
当期変動額					
剰余金の配当			△58,279		△58,279
親会社株主に帰属する当期純利益			911,887		911,887
自己株式の取得				△4,715	△4,715
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	—	853,607	△4,715	848,892
当期末残高	5,115,224	4,473,939	1,069,951	△54,637	10,604,477

	その他の包括利益累計額				
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	為替換算調整勘定	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計
当期首残高	604,425	△401	931,543	△152,100	1,383,465
当期変動額					
剰余金の配当					
親会社株主に帰属する当期純利益					
自己株式の取得					
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△2,908	△3,521	118,803	△13,335	99,037
当期変動額合計	△2,908	△3,521	118,803	△13,335	99,037
当期末残高	601,516	△3,923	1,050,347	△165,436	1,482,503

	純資産合計
当期首残高	11,139,051
当期変動額	
剰余金の配当	△58,279
親会社株主に帰属する当期純利益	911,887
自己株式の取得	△4,715
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	99,037
当期変動額合計	947,929
当期末残高	12,086,980

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	5,115,224	4,473,939	1,069,951	△54,637	10,604,477
当期変動額					
剰余金の配当			△97,059		△97,059
親会社株主に帰属する当期純利益			795,741		795,741
自己株式の取得				△1,348	△1,348
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	—	698,682	△1,348	697,334
当期末残高	5,115,224	4,473,939	1,768,633	△55,985	11,301,812

	その他の包括利益累計額				
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	為替換算調整勘定	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計
当期首残高	601,516	△3,923	1,050,347	△165,436	1,482,503
当期変動額					
剰余金の配当					
親会社株主に帰属する当期純利益					
自己株式の取得					
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△159,686	1,688	△146,387	17,249	△287,135
当期変動額合計	△159,686	1,688	△146,387	17,249	△287,135
当期末残高	441,829	△2,234	903,959	△148,187	1,195,367

	純資産合計
当期首残高	12,086,980
当期変動額	
剰余金の配当	△97,059
親会社株主に帰属する当期純利益	795,741
自己株式の取得	△1,348
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△287,135
当期変動額合計	410,199
当期末残高	12,497,179

## ④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>		
税金等調整前当期純利益	1,005,722	932,827
減価償却費	339,378	326,597
減損損失	—	8,892
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	35,582	9,881
賞与引当金の増減額 (△は減少)	14,748	△29,132
退職給付に係る資産の増減額 (△は増加)	△54,211	△30,297
受取利息及び受取配当金	△55,660	△61,168
支払利息	31,437	31,438
固定資産売却損益 (△は益)	△1,387	—
売上債権の増減額 (△は増加)	△719,599	△172,946
たな卸資産の増減額 (△は増加)	△329,179	△417,699
仕入債務の増減額 (△は減少)	603,235	△177,051
その他	127,284	△59,942
小計	997,351	361,398
利息及び配当金の受取額	55,542	58,906
利息の支払額	△31,351	△31,351
法人税等の支払額	△100,822	△165,964
営業活動によるキャッシュ・フロー	920,719	222,988
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>		
定期預金の預入による支出	—	△1,002,462
定期預金の払戻による収入	—	489,213
有形固定資産の取得による支出	△226,652	△204,769
有形固定資産の売却による収入	2,854	382
無形固定資産の取得による支出	—	△798
投資有価証券の取得による支出	△3,930	△3,983
関係会社株式の取得による支出	—	△64,945
差入保証金の回収による収入	3,106	302,716
その他	△25,703	6,312
投資活動によるキャッシュ・フロー	△250,325	△478,334
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>		
自己株式の取得による支出	△4,589	△1,383
配当金の支払額	△57,884	△96,707
財務活動によるキャッシュ・フロー	△62,474	△98,091
現金及び現金同等物に係る換算差額	△54,224	△47,788
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	553,695	△401,225
現金及び現金同等物の期首残高	4,087,788	4,641,484
現金及び現金同等物の期末残高	※ 4,641,484	※ 4,240,259

## 【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

### 1. 連結の範囲に関する事項

#### (1) 連結子会社の数 6社

連結子会社名は、索馬龍（香港）有限公司、索馬龍精細化工（珠海）有限公司、台灣索馬龍股份有限公司、Siam Somar Co., Ltd.、Somar Corporation India Pvt. Ltd. 及びSomar North America Corporationであります。

#### (2) 非連結子会社の名称等

主要な非連結子会社

Somar Europe B.V.

SOMAR VIETNAM CORPORATION Co., Ltd

(連結の範囲から除いた理由)

非連結子会社は、いずれも小規模であり、合計の総資産、売上高、当期純損益（持分に見合う額）及び利益剰余金（持分に見合う額）等は、いずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないためであります。

### 2. 持分法の適用に関する事項

#### (1) 持分法を適用した非連結子会社及び関連会社の名称等

持分法を適用した非連結子会社及び関連会社はありません。

#### (2) 持分法を適用していない主要な非連結子会社及び関連会社の名称等

非連結子会社

Somar Europe B.V.

SOMAR VIETNAM CORPORATION Co., Ltd

(持分法を適用していない理由)

持分法を適用していない非連結子会社は、当期純損益（持分に見合う額）及び利益剰余金（持分に見合う額）等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、かつ、全体としても重要性がないため持分法の適用範囲から除外しております。

### 3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のうち索馬龍（香港）有限公司、索馬龍精細化工（珠海）有限公司、台灣索馬龍股份有限公司、Siam Somar Co., Ltd. 及びSomar North America Corporationの決算日は12月31日であります。

連結財務諸表の作成に当たっては、同決算日現在の財務諸表を使用しております。ただし、連結決算日までの期間に発生した重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

その他の連結子会社の事業年度の末日は、連結会計年度と一致しております。

### 4. 会計方針に関する事項

#### (1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

##### ①有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

期末日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）を採用しております。

時価のないもの

移動平均法による原価法を採用しております。

##### ②デリバティブ

時価法を採用しております。

##### ③たな卸資産

主として移動平均法による原価法（貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）を採用しております。

#### (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

##### ①有形固定資産

主として定率法を採用しております。ただし、1998年4月1日以降に取得した建物（建物附属設備を除く）並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物及び構築物	10年～50年
機械装置及び運搬具	4年～15年
その他	4年～15年

## ②無形固定資産

定額法を採用しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）による定額法を採用しております。

## (3) 重要な引当金の計上基準

### ①貸倒引当金

債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等の特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

### ②賞与引当金

当社は、従業員賞与の支給に備えるため、翌連結会計年度の支給見込額のうち、当連結会計年度の負担額を計上しております。

## (4) 退職給付に係る会計処理の方法

当社は、確定給付型及び確定拠出型の退職給付制度を採用しております。また、一部の海外連結子会社は、確定拠出型の退職給付制度を採用しております。

### ①退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、期間定額基準によっております。

### ②数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異については、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務年数以内の一定年数（8年）による定額法により按分した額を発生の日翌連結会計年度から費用処理しております。

### ③未認識数理計算上の差異の会計処理方法

未認識数理計算上の差異については、税効果を調整の上、純資産の部におけるその他の包括利益累計額の退職給付に係る調整累計額に計上しております。

## (5) 重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。なお、在外子会社等の資産及び負債は、各社の決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定に含めております。

## (6) 重要なヘッジ会計の方法

### ①ヘッジ会計の方法

原則として繰延ヘッジ処理を採用しております。なお、為替予約については振当処理の要件を満たしている場合は振当処理を、金利スワップについては特例処理の要件を満たしている場合は特例処理を採用しております。

### ②ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段	ヘッジ対象
為替予約	外貨建金銭債権債務及び外貨建予定取引
金利スワップ	借入金

### ③ヘッジ方針

当社の社内規定に基づき、将来の為替及び金利変動リスク回避のためにヘッジを行っております。

### ④有効性評価の方法

ヘッジ対象の相場変動、キャッシュ・フローとヘッジ手段の間に高い相関関係があることを確認し、有効性の評価としております。ただし、振当処理の要件及び特例処理の要件をもって、有効性の判定を省略しております。



(7) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金（現金及び現金同等物）の範囲は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び取得日から満期日までの期間が3ヶ月以内の定期預金であります。

(8) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

①消費税等の会計処理方法

税抜方式を採用しております。

(未適用の会計基準等)

- ・「収益認識に関する会計基準」（企業会計基準第29号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会）
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会）

(1) 概要

国際会計基準審議会（IASB）及び米国財務会計基準審議会（FASB）は、共同して収益認識に関する包括的な会計基準の開発を行い、2014年5月に「顧客との契約から生じる収益」（IASBにおいてはIFRS第15号、FASBにおいてはTopic606）を公表しており、IFRS第15号は2018年1月1日以後開始する事業年度から、Topic606は2017年12月15日より後に開始する事業年度から適用される状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、収益認識に関する包括的な会計基準が開発され、適用指針と合わせて公表されたものです。

企業会計基準委員会の収益認識に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、IFRS第15号と整合性を図る便益の1つである財務諸表間の比較可能性の観点から、IFRS第15号の基本的な原則を取り入れることを出発点とし、会計基準を定めることとされ、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮すべき項目がある場合には、比較可能性を損なわせない範囲で代替的な取扱いを追加することとされております。

(2) 適用予定日

2022年3月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であり、

ます。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。）を当連結会計年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更するとともに、税効果会計関係注記を変更しております。この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」に表示しておりました187,420千円の内、173,516千円は「固定負債」の「繰延税金負債」と相殺し、13,903千円は「投資その他の資産」の「繰延税金資産」に表示しております。「固定負債」の「繰延税金負債」表示しておりました213,393千円の内、173,516千円は「投資その他の資産」の「繰延税金資産」と相殺し、39,876千円と表示しております。

なお、同一納税主体の繰延税金資産と繰延税金負債を相殺したことに伴い、変更前と比べて資産合計及び負債合計はそれぞれ173,516千円減少しております。

また、税効果会計関係注記において、税効果会計基準一部改正第3項から第5項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)（評価性引当額の合計額を除く。）及び同注解(注9)に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前連結会計年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取扱いに従って記載しておりません。

(連結損益計算書)

前連結会計年度において、「営業外費用」の「その他」に含めていた「固定資産除却損」及び「支払補償費」は、金額の重要性が増したため、当連結会計年度より独立掲記しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行い、前連結会計年度の連結損益計算書において、「営業外費用」の「その他」に表示していた10,955千円は、「固定資産除却損」6,770千円、「支払補償費」172千円、「その他」4,012千円と表示しております。

(連結貸借対照表関係)

※1 たな卸資産の内訳は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
商品及び製品	1,535,144千円	1,849,068千円
仕掛品	142,350	149,231
原材料及び貯蔵品	569,193	651,014

※2 非連結子会社及び関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
投資有価証券(株式)	－千円	64,945千円

※3 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
建物及び構築物	821,303千円	774,956千円
土地	126,032	126,032
投資有価証券	602,187	410,780
計	1,549,523	1,311,769

担保付債務は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
買掛金	1,679,573千円	1,216,236千円
1年内返済予定の長期借入金	－	3,500,000
長期借入金	3,500,000	－
計	5,179,573	4,716,236

(連結損益計算書関係)

※1 期末たな卸高は収益性の低下に伴う簿価切下後の金額であり、売上原価に含まれるたな卸資産評価損(洗替法による戻入額相殺後の額)は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	△20,764千円	△33,220千円

※2 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
発送配達費	337,127千円	359,578千円
従業員給与及び手当	612,078	609,601
賞与引当金繰入額	61,353	49,062
退職給付費用	15,987	30,670
賃借料	303,433	303,679
研究開発費	353,132	340,703

※3 固定資産売却益の内容は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
機械装置及び運搬具	1,762千円	－千円
計	1,762	－

※4 固定資産売却損の内容は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
機械装置及び運搬具	375千円	一千円
計	375	—

※5 一般管理費及び当期製造費用に含まれる研究開発費の総額  
なお、当期製造費用に含まれる研究開発費はありません。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	353,132千円	340,703千円

※6 減損損失

当連結会計年度において、当社グループは以下の資産グループについて減損損失を計上しております。

場 所	用 途	種 類
Chonburi, Thailand (Siam Somar Co., Ltd.)	遊休資産	建物及び構築物 機械装置及び運搬具

当社グループは、事業の種類を基準とした管理会計上の区分に従ってグルーピングを行っております。また、遊休資産については、個別物件単位でグルーピングを行っております。

当社連結子会社であるSiam Somar Co., Ltd.の遊休資産について、今後の使用見込みがないことから、当該資産の帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失8,892千円として特別損失に計上しております。

その内訳は、建物及び構築物3,320千円、機械装置及び運搬具5,571千円であります。

なお、前連結会計年度については、該当事項はありません。

(連結包括利益計算書関係)

※ その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	△6,169千円	△228,871千円
組替調整額	—	—
税効果調整前	△6,169	△228,871
税効果額	3,260	69,185
その他有価証券評価差額金	△2,908	△159,686
繰延ヘッジ損益：		
当期発生額	△304	△1,731
組替調整額	△4,768	4,165
税効果調整前	△5,073	2,434
税効果額	1,552	△745
繰延ヘッジ損益	△3,521	1,688
為替換算調整勘定：		
当期発生額	118,803	△146,387
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	△22,953	197
組替調整額	3,732	24,665
税効果調整前	△19,221	24,862
税効果額	5,885	△7,612
退職給付に係る調整額	△13,335	17,249
その他の包括利益合計	99,037	△287,135

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首株式数(千株)	当連結会計年度増加株式数(千株)	当連結会計年度減少株式数(千株)	当連結会計年度末株式数(千株)
発行済株式				
普通株式(注)1	19,587	—	17,628	1,958
合計	19,587	—	17,628	1,958
自己株式				
普通株式(注)2.3	160	6	149	17
合計	160	6	149	17

(注) 1. 普通株式の発行済株式の株式数の減少17,628千株は、株式併合によるものであります。

2. 普通株式の自己株式の株式数の増加6千株は、株式併合に伴う端数株式の買取りによる増加0千株及び、単元未満株式の買取りによる増加6千株(株式併合前5千株、株式併合後0千株)であります。

3. 普通株式の自己株式の株式数の減少149千株は、株式併合によるものであります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額(千円)	1株当たり配当額(円)	基準日	効力発生日
2017年6月28日 定時株主総会	普通株式	58,279	3	2017年3月31日	2017年6月29日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額(千円)	配当の原資	1株当たり配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年6月27日 定時株主総会	普通株式	97,059	利益剰余金	50	2018年3月31日	2018年6月28日

(注) 2017年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行いました。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期 首株式数（千株）	当連結会計年度増 加株式数（千株）	当連結会計年度減 少株式数（千株）	当連結会計年度末 株式数（千株）
発行済株式				
普通株式	1,958	—	—	1,958
合計	1,958	—	—	1,958
自己株式				
普通株式（注）	17	0	—	18
合計	17	0	—	18

（注）普通株式の自己株式の株式数の増加0千株は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

（決 議）	株式の種類	配当金の総額 （千円）	1株当たり 配当額 （円）	基準日	効力発生日
2018年6月27日 定時株主総会	普通株式	97,059	50	2018年3月31日	2018年6月28日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

（決 議）	株式の種類	配当金の総額 （千円）	配当の原資	1株当たり 配当額 （円）	基準日	効力発生日
2019年6月26日 定時株主総会	普通株式	97,031	利益剰余金	50	2019年3月31日	2019年6月27日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※ 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表の「現金及び預金」との関係

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
現金及び預金勘定	4,641,484千円	4,739,528千円
預入期間が3か月を超える定期預金	—	△499,269
現金及び現金同等物	4,641,484	4,240,259

(リース取引関係)

1. オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
1年内	25,173	26,603
1年超	37,237	35,778
合計	62,410	62,382

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用については短期的な預金等に限定し、また、資金調達については銀行借入による方針であります。デリバティブは、相場変動リスクを回避する目的で利用する方針であり、投機目的のために利用することはしない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である受取手形及び売掛金並びに電子記録債権は、顧客の信用リスクに晒されております。当該リスクに関しては、与信管理規定に従い、リスク低減を図っております。

投資有価証券は主として株式であり、市場価格の変動リスクに晒されておりますが、上場株式については四半期ごとに時価の把握を行っております。

取引先企業等に対し保証金の差入を行っております。

営業債務である支払手形及び買掛金は、そのほとんどが6か月以内の支払期日であります。

借入金には主に長期運転資金等に係る資金調達であります。

デリバティブ取引は、外貨建金銭債権債務に係る為替の変動リスクに対するヘッジを目的とした先物為替予約取引であります。デリバティブ取引の利用に際しては、稟議規定に基づき決定し、当社の経理担当部門が実施しております。なお、当社のデリバティブ取引の契約先はいずれも信用度の高い国内の銀行であるため、相手方の契約不履行によるリスクはほとんどないと認識しております。

(3) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがあります。

また、注記事項(デリバティブ取引関係)におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは含まれておりません（（注）2. 参照）。

前連結会計年度（2018年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	4,641,484	4,641,484	—
(2) 受取手形及び売掛金	5,330,450	5,330,450	—
(3) 電子記録債権	1,703,741	1,703,741	—
(4) 投資有価証券	1,896,640	1,896,640	—
(5) 差入保証金	225,996	225,436	△559
資産計	13,798,313	13,797,753	△559
(1) 支払手形及び買掛金	3,762,522	3,762,522	—
(2) 1年内返済予定の長期借入金	—	—	—
(3) 未払法人税等	127,735	127,735	—
(4) 長期借入金	3,500,000	3,490,556	△9,443
負債計	7,390,258	7,380,815	△9,443
デリバティブ取引 (*)	(5,654)	(5,654)	—

(\*) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる場合については（ ）で示しております。

当連結会計年度（2019年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	4,739,528	4,739,528	—
(2) 受取手形及び売掛金	5,272,329	5,272,329	—
(3) 電子記録債権	1,894,393	1,894,393	—
(4) 投資有価証券	1,668,032	1,668,032	—
(5) 差入保証金	224,103	225,179	1,076
資産計	13,798,387	13,799,463	1,076
(1) 支払手形及び買掛金	3,564,531	3,564,531	—
(2) 1年内返済予定の長期借入金	3,500,000	3,499,583	△416
(3) 未払法人税等	48,385	48,385	—
(4) 長期借入金	—	—	—
負債計	7,112,916	7,112,500	△416
デリバティブ取引 (*)	(3,220)	(3,220)	—

(\*) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる場合については（ ）で示しております。

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金、(2) 受取手形及び売掛金、(3) 電子記録債権

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(4) 投資有価証券

投資有価証券の時価の算定は、株式等は取引所の価格によっており、その他は取引金融機関等から提示された価格によっております。また、保有目的ごとの投資有価証券に関する事項については、注記事項（有価証券関係）をご参照下さい。

(5) 差入保証金

差入保証金の時価の算定は、その将来キャッシュ・フローを国債の利回り等適切な指標で割り引いた現在価値により算定しております。

負 債

(1) 支払手形及び買掛金、(3) 未払法人税等

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(2) 1年内返済予定の長期借入金、(4) 長期借入金

長期借入金の時価の算定は、元利金の合計額を、同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。

デリバティブ取引

注記事項（デリバティブ取引関係）をご参照下さい。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：千円)

区分	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
非上場株式	106	65,051
差入保証金	1,141,544	863,686

非上場株式については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「(4) 投資有価証券」には含めておりません。

なお、非上場株式には非連結子会社及び関連会社株式が含まれております。

また、差入保証金のうち取引保証金については、取引先企業との取引の継続期間を合理的に算定することが出来ず、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「(5) 差入保証金」には含めておりません。



3. 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額  
前連結会計年度（2018年3月31日）

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	4,641,484	—	—	—
受取手形及び売掛金	5,330,450	—	—	—
電子記録債権	1,703,741	—	—	—
差入保証金	—	5,320	203,593	17,082
合計	11,675,676	5,320	203,593	17,082

投資有価証券のうち、満期のあるものはありません。

また、差入保証金のうち取引保証金については、償還予定時期を合理的に見積もることが出来ないことから、上記の表には含めておりません。

当連結会計年度（2019年3月31日）

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	4,739,528	—	—	—
受取手形及び売掛金	5,272,329	—	—	—
電子記録債権	1,894,393	—	—	—
差入保証金	—	—	207,953	16,149
合計	11,906,251	—	207,953	16,149

投資有価証券のうち、満期のあるものはありません。

また、差入保証金のうち取引保証金については、償還予定時期を合理的に見積もることが出来ないことから、上記の表には含めておりません。

4. 長期借入金の連結決算日後の返済予定額  
前連結会計年度（2018年3月31日）

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
長期借入金	—	3,500,000	—	—	—	—
合計	—	3,500,000	—	—	—	—

当連結会計年度（2019年3月31日）

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
長期借入金	3,500,000	—	—	—	—	—
合計	3,500,000	—	—	—	—	—

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度 (2018年3月31日)

	種類	連結貸借対照表 計上額 (千円)	取得原価 (千円)	差額 (千円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	株式	1,877,553	1,013,554	863,998
	その他	9,634	9,562	71
	小計	1,887,187	1,023,117	864,070
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	株式	6,259	7,263	△1,003
	その他	3,192	3,192	—
	小計	9,452	10,455	△1,003
合計		1,896,640	1,033,573	863,066

(注) 非上場株式 (連結貸借対照表計上額 106千円) については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度 (2019年3月31日)

	種類	連結貸借対照表 計上額 (千円)	取得原価 (千円)	差額 (千円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	株式	1,592,294	972,475	619,818
	その他	34,096	9,035	25,060
	小計	1,626,390	981,511	644,878
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	株式	41,641	52,325	△10,683
	その他	—	—	—
	小計	41,641	52,325	△10,683
合計		1,668,032	1,033,837	634,194

(注) 非上場株式 (連結貸借対照表計上額 1,306千円) 及び非連結子会社株式 (連結貸借対照表計上額 63,745千円) については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

2. 売却したその他有価証券

前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当事項はありません。

3. 償還したその他有価証券

前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当事項はありません。

#### 4. 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

有価証券について63千円（その他有価証券の非上場株式 63千円）減損処理を行っております。

なお、減損処理にあたっては、期末における時価が取得原価に比べ50%以上下落した場合には、原則として減損処理を行い、30～50%程度下落した場合には、過去3年間の時価の推移をふまえ、発行者の財政状態などを総合的に勘案したうえで、回復可能性が認められない場合に、必要と認められた額について減損処理を行っております。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

該当事項はありません。

#### (デリバティブ取引関係)

##### 1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

###### (1) 通貨関連

前連結会計年度（2018年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（2019年3月31日）

該当事項はありません。

###### (2) 金利関連

前連結会計年度（2018年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（2019年3月31日）

該当事項はありません。

##### 2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

###### (1) 通貨関連

前連結会計年度（2018年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (千円)	契約額等のうち1年超 (千円)	時価 (千円)
為替予約の 振当処理	為替予約取引 買建				
	米ドル	買掛金	92,161	—	△2,885
	ユーロ	買掛金	73,793	—	△2,768
合計			165,955	—	△5,654

(注) 時価の算定方法

取引先金融機関から提示された時価に基づき算定しております。

当連結会計年度（2019年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (千円)	契約額等のうち1年超 (千円)	時価 (千円)
為替予約の 振当処理	為替予約取引 買建				
	米ドル	買掛金	85,976	—	△671
	ユーロ	買掛金	116,417	—	△2,548
合計			202,394	—	△3,220

(注) 時価の算定方法

取引先金融機関から提示された時価に基づき算定しております。

(2) 金利関連  
前連結会計年度（2018年3月31日）  
該当事項はありません。

当連結会計年度（2019年3月31日）  
該当事項はありません。

（退職給付関係）

1. 採用している退職給付制度の概要

当社は、従業員に対し、確定給付型及び確定拠出型の退職給付制度を採用しております。  
また、一部の海外連結子会社は、確定拠出型の退職給付制度を採用しております。

2. 確定給付制度

(1) 原則法を適用した制度の退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付債務の期首残高	2,113,785千円	2,048,727千円
勤務費用	106,524	102,905
利息費用	6,552	4,097
数理計算上の差異の発生額	6,231	△53,866
退職給付の支払額	△184,367	△123,344
退職給付債務の期末残高	2,048,727	1,978,520

(2) 原則法を適用した制度の年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
年金資産の期首残高	2,183,379千円	2,153,311千円
期待運用収益	107,749	92,377
数理計算上の差異の発生額	△16,722	△53,668
事業主からの拠出額	63,271	69,588
退職給付の支払額	△184,367	△123,344
年金資産の期末残高	2,153,311	2,138,264

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	2,048,727千円	1,978,520千円
年金資産	△2,153,311	△2,138,264
	△104,584	△159,744
非積立型制度の退職給付債務	—	—
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△104,584	△159,744
退職給付に係る資産	△104,584	△159,744
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△104,584	△159,744

## (4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
勤務費用	106,524千円	102,905千円
利息費用	6,552	4,097
期待運用収益	△107,749	△92,377
数理計算上の差異の費用処理額	3,732	24,665
確定給付制度に係る退職給付費用	9,059	39,291

## (5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
数理計算上の差異	19,221千円	△24,862千円
合計	19,221	△24,862

## (6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
未認識数理計算上の差異	238,450千円	213,587千円
合計	238,450	213,587

## (7) 年金資産に関する事項

## ① 年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
株式	32%	32%
債券	45	46
その他	23	22
合計	100	100

## ② 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

## (8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎（加重平均で表わしております。）

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
割引率	0.3%	0.2%
長期期待運用収益率	4.9%	4.3%
退職給付見込額の期間配分方法	期間定額基準	期間定額基準
数理計算上の差異の処理年数	8年	8年

## 3. 確定拠出制度

当社は、日本電子回路厚生年金基金（総合型）の解散に伴い、2017年7月より新たに確定拠出型の企業年金制度を採用しております。

当社グループの確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度は36,818千円、当連結会計年度は46,714千円であります。

#### 4. 複数事業主制度

複数事業主制度に係る企業年金制度として、日本電子回路厚生年金基金（総合型）に加入しておりましたが、同基金は2017年3月31日付で厚生労働大臣の認可を受け解散いたしました。

同基金での自社の拠出に対応する年金資産を合理的に計算することが出来ないため、確定拠出制度と同様に会計処理をしておりました。同基金への要拠出額は前連結会計年度 1,378千円であります。

（税効果会計関係）

##### 1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
繰越欠損金	1,433,296千円	1,359,442千円
未払事業税	2,786	343
賞与引当金	46,236	37,356
投資有価証券評価損否認額	47,424	47,424
役員退職慰労金未払額	12,251	12,251
貸倒引当金	158,498	157,859
固定資産減損損失	60,746	60,746
棚卸資産評価損	22,331	11,306
関係会社株式	138,978	138,978
その他	66,943	62,772
繰延税金資産小計	1,989,491	1,888,481
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額	—	△1,236,895
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	—	△424,221
評価性引当額小計	△1,721,325	△1,661,117
繰延税金資産合計	268,165	227,363
繰延税金負債		
退職給付に係る資産	△32,023	△48,913
その他有価証券評価差額金	△261,550	△192,365
その他	△564	△371
計	△294,139	△241,650
繰延税金資産の純額(△は負債)	△25,973	△14,286

当連結会計年度（2019年3月31日）

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)	合計 (千万円)
税務上の繰越欠損金(※1)	6,803	—	1,947	8,845	213,477	1,128,369	1,359,442
評価性引当額	—	—	△1,947	△8,845	△97,733	△1,128,369	△1,236,895
繰延税金資産	6,803	—	—	—	115,743	—	(※2) 122,546

(※1) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

(※2) 税務上の繰越欠損金に係る繰延税金資産は、翌連結会計年度以降に課税所得が見込まれることにより、税務上の繰越欠損金の一部を回収可能と判断しております。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
法定実効税率 (調整)	30.9%	30.6%
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.3	0.4
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△0.3	△0.3
住民税均等割等	1.6	1.5
税額控除等	△0.8	△0.8
評価性引当額の増減	△15.3	△7.6
内部取引相殺消去に係るもの	△0.3	0.3
海外連結子会社の税率差異等	△3.7	△5.2
海外連結子会社の優遇税制に伴う免税額	△3.0	△4.4
税率変更による期末繰延税金資産の減額修正	△0.1	—
その他	0.0	0.1
税効果会計適用後の法人税等の負担率	9.3	14.7

(資産除去債務関係)

資産除去債務のうち連結貸借対照表に計上しているもの

イ 当該資産除去債務の概要及び金額の算定方法

当社は自己所有の建物等において、建設工事に係る資材の再資源化等に関する法律（建設リサイクル法）及び石綿障害予防規則に基づき、解体時に要する費用のうち、当該法令に定める範囲となる費用を合理的に見積り、資産除去債務を計上しております。資産除去債務の見積りにあたり、支出までの見込期間は取得時からの耐用年数（30年から50年）によっており、割引率は2.266%から2.285%を採用しております。

ロ 当該資産除去債務の総額の増減

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
期首残高	65,989千円	61,702千円
時の経過による調整額	212	217
資産除去債務の履行による減少額	△4,732	—
その他増減額(△は減少)	232	—
期末残高	61,702	61,920

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社は「メーカー機能」と「商社機能」を併せ持つ企業として、両機能の一体化によるシナジー効果を追求し、顧客ニーズを迅速に把握しつつ、自社製品開発に活かしていく事業活動を展開しております。

従って、当社は会社組織の事業部門を経営管理上の区分と位置づけており、「高機能材料事業」「環境材料事業」「食品材料事業」を報告セグメントとしております。

「高機能材料事業」はコーティング製品、高機能樹脂製品、電子材料、機能性樹脂、「環境材料事業」はファイナケミカルズ、製紙用化学品、「食品材料事業」は食品素材等の製造販売及び仕入販売を行っております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一であります。

報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値であります。

なお、当連結会計年度より、「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日）等を適用したため、前連結会計年度については遡及適用後の数値を記載しております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：千円）

	報告セグメント				その他 (注) 1	合計
	高機能材料 事業	環境材料 事業	食品材料 事業	計		
売上高						
外部顧客への売上高	17,205,437	4,232,174	1,022,721	22,460,333	54,180	22,514,514
セグメント間の内部 売上高又は振替高	—	—	—	—	—	—
計	17,205,437	4,232,174	1,022,721	22,460,333	54,180	22,514,514
セグメント利益	1,225,666	△17,467	101,501	1,309,700	4,853	1,314,554
セグメント資産	11,661,876	3,158,904	765,399	15,586,180	19,666	15,605,847
その他の項目						
減価償却費	299,248	17,229	387	316,864	50	316,915
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	225,440	10,649	68	236,158	—	236,158

(注) 1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、新規開発事業等を含んでおります。

2. セグメント負債については、経営資源の配分の決定及び業績を評価するための検討対象とはなっていないため記載しておりません。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：千円）

	報告セグメント				その他 (注) 1	合計
	高機能材料 事業	環境材料 事業	食品材料 事業	計		
売上高						
外部顧客への売上高	17,054,459	4,668,853	1,258,769	22,982,082	66,009	23,048,092
セグメント間の内部 売上高又は振替高	—	—	—	—	—	—
計	17,054,459	4,668,853	1,258,769	22,982,082	66,009	23,048,092
セグメント利益	1,018,458	17,408	112,897	1,148,765	6,029	1,154,794
セグメント資産	11,795,700	3,320,949	954,493	16,071,143	22,329	16,093,472
その他の項目						
減価償却費	288,988	16,017	278	305,284	31	305,316
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	274,144	10,271	64	284,480	—	284,480

(注) 1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、新規開発事業等を含んでおります。

2. セグメント負債については、経営資源の配分の決定及び業績を評価するための検討対象とはなっていないため記載しておりません。



4. 報告セグメント合計額と連結財務諸表計上額との差額及び当該差額の主な内容（差異調整に関する事項）

(単位：千円)

売上高	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	22,460,333	22,982,082
「その他」の区分の売上高	54,180	66,009
連結財務諸表の売上高	22,514,514	23,048,092

(単位：千円)

利益	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	1,309,700	1,148,765
「その他」の区分の利益	4,853	6,029
全社費用（注）	△287,066	△263,792
連結財務諸表の営業利益	1,027,487	891,001

(注) 全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない販売費及び一般管理費であります。

(単位：千円)

資産	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	15,586,180	16,071,143
「その他」の区分の資産	19,666	22,329
全社資産（注）	4,785,223	4,455,531
連結財務諸表の資産合計	20,391,070	20,549,004

(注) 全社資産は、各報告セグメントに配分していない資産であります。

(単位：千円)

その他の項目	報告セグメント計		その他		調整額（注）		連結財務諸表計上額	
	前連結会計年度	当連結会計年度	前連結会計年度	当連結会計年度	前連結会計年度	当連結会計年度	前連結会計年度	当連結会計年度
減価償却費	316,864	305,284	50	31	22,462	21,281	339,378	326,597
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	236,158	284,480	—	—	3,829	11,907	239,988	296,387

(注) 減価償却費、有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額は、各報告セグメントに配分していない全社の減価償却費、有形固定資産及び無形固定資産の増加額であります。

【関連情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

報告セグメントと同一区分のため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：千円)

日本	アジア	その他の地域	合計
18,384,195	3,937,712	192,605	22,514,514

(注) 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

(単位：千円)

日本	アジア	その他の地域	合計
1,382,065	1,358,431	3,599	2,744,097

(注) アジアのうち中国は501,400千円、タイは833,451千円であります。

3. 主要な顧客ごとの情報

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

報告セグメントと同一区分のため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：千円)

日本	アジア	その他の地域	合計
18,072,147	4,679,042	296,901	23,048,092

(注) 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

(単位：千円)

日本	アジア	その他の地域	合計
1,420,064	1,234,621	3,470	2,658,156

(注) アジアのうち中国は437,524千円、タイは772,164千円であります。

3. 主要な顧客ごとの情報

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

(単位：千円)

	高機能材料事業	環境材料事業	食品材料事業	その他	全社・消去	合計
減損損失	8,892	—	—	—	—	8,892

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1. 関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主(個人の場合に限る。)等  
前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

種類	会社等の名称 又は 氏名	所在地	資本金 又は 出資金 (千円)	事業の 内容又 は職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の 内容	取引 金額 (千円) (注) 5	科目	期末 残高 (千円)
役員及びその 近親者が議決 権の過半数を 所有している 会社等	株式会社 宗 屋 (注) 1	東京都 中央区	80,000	ゴルフ 場経営 及び 不動産 賃貸 管理業等	(被所有) 直接 17.4 間接 12.4	-	建物の 賃 借 (注) 2	229,301	前払費用 差入保証金	17,437 198,400
	雪ヶ谷 化学工業 株式会社 (注) 3	東京都 品川区	10,000	特殊発 泡体等 の製造 販売等	-	役員の兼任 1名	商材の 購 入 (注) 4	20,755	買掛金	9,293

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

種類	会社等の名称 又は 氏名	所在地	資本金 又は 出資金 (千円)	事業の 内容又 は職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の 内容	取引 金額 (千円) (注) 5	科目	期末 残高 (千円)
役員及びその 近親者が議決 権の過半数を 所有している 会社等	株式会社 宗 屋 (注) 1	東京都 中央区	80,000	ゴルフ 場経営 及び 不動産 賃貸 管理業等	(被所有) 直接 11.2 間接 12.4	-	建物の 賃 借 (注) 2	228,182	前払費用 差入保証金	17,350 197,440
	雪ヶ谷 化学工業 株式会社 (注) 3	東京都 品川区	10,000	特殊発 泡体等 の製造 販売等	-	役員の兼任 1名	商材の 購 入 (注) 4	9,432	買掛金	3,734

取引条件及び取引条件の決定方針等

- (注) 1. 株式会社宗屋は当社取締役曾谷太の二親等以内の親族が、議決権の100%を直接所有している会社であります。
2. 建物の賃借料等については、近隣の取引実勢を勘案し、価格交渉の上で決定しております。
3. 雪ヶ谷化学工業株式会社は当社社外取締役坂本昇及びその近親者が、議決権の過半数を自己の計算において所有している会社であります。
4. 商材の購入については、一般的な取引条件を勘案して決定しております。
5. 取引金額には消費税等が含まれておりません。期末残高には消費税等が含まれております。

(2) 連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引  
 前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)  
 連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主(個人の場合に限る。)等

種類	会社等の名称 又は 氏名	所在地	資本金 又は 出資金 (千THB)	事業の 内容又は 職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合(%)	関連 当事者 との関係	取引の 内容	取引 金額 (千円) (注)3	科目	期末 残高 (千円)
役員及びその近親者が議決権の過半数を所有している会社等(当該会社等の子会社を含む)	NiKKi Fron (Thailand) Co., Ltd. (注)1	Chonburi, Thailand	52,100	F R P 製品等の 製造販売等	—	役員の兼任 1名	工場 スペース の賃貸 (注)2	10,729	固定負債 その他	3,029

当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)  
 連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主(個人の場合に限る。)等

種類	会社等の名称 又は 氏名	所在地	資本金 又は 出資金 (千THB)	事業の 内容又は 職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合(%)	関連 当事者 との関係	取引の 内容	取引 金額 (千円) (注)3	科目	期末 残高 (千円)
役員及びその近親者が議決権の過半数を所有している会社等(当該会社等の子会社を含む)	NiKKi Fron (Thailand) Co., Ltd. (注)1	Chonburi, Thailand	52,100	F R P 製品等の 製造販売等	—	役員の兼任 1名	工場 スペース の賃貸 (注)2	10,613	固定負債 その他	2,986

取引条件及び取引条件の決定方針等

- (注)1. NiKKi Fron (Thailand) Co., Ltd. は当社取締役春日孝之及びその近親者が、議決権の過半数を自己の計算において所有している会社等の子会社であります。
2. 連結子会社であるSiam Somar Co., Ltd. が所有する工場スペースの賃貸料については、近隣の取引実勢を勘案し、価格交渉の上で決定しております。
3. 取引金額には消費税等が含まれておりません。期末残高には消費税等が含まれております。

2. 親会社又は重要な関連会社に関する注記

前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)  
 親会社及び重要な関連会社は存在しないため、該当事項はありません。

当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)  
 親会社及び重要な関連会社は存在しないため、該当事項はありません。

## (1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり純資産額	6,226.59円	6,439.73円
1株当たり当期純利益	469.57円	410.00円

- (注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
2. 2017年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行いました。これに伴い、1株当たり純資産額、1株当たり当期純利益については、前連結会計年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定して算定しております。
3. 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益(千円)	911,887	795,741
普通株主に帰属しない金額(千円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益(千円)	911,887	795,741
期中平均株式数(株)	1,941,949	1,940,850

## (重要な後発事象)

該当事項はありません

## ⑤【連結附属明細表】

## 【社債明細表】

該当事項はありません。

## 【借入金等明細表】

区分	当連結会計年度 期首残高 (千円)	当連結会計年度 期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	—	—	—	—
1年以内に返済予定の長期借入金	—	3,500,000	0.9	2019年
1年以内に返済予定のリース債務	—	—	—	—
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	3,500,000	—	—	—
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	—	—	—	—
その他有利子負債	—	—	—	—
合計	3,500,000	3,500,000	—	—

(注) 1. 平均利率については、期末借入残高に対する加重平均利率を記載しております。

## 【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により記載を省略しております。

## (2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(千円)	5,950,800	11,479,243	17,711,150	23,048,092
税金等調整前四半期(当期) 純利益(千円)	349,799	594,427	862,410	932,827
親会社株主に帰属する四半期 (当期)純利益(千円)	301,889	526,727	749,997	795,741
1株当たり四半期(当期) 純利益(円)	155.52	271.37	386.42	410.00

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益(円)	155.52	115.84	115.04	23.57

## 2 【財務諸表等】

### (1) 【財務諸表】

#### ① 【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	2,969,068	2,775,014
受取手形	78,393	92,361
売掛金	※ <sub>3</sub> 4,974,432	※ <sub>3</sub> 4,634,359
電子記録債権	1,703,741	1,894,393
たな卸資産	※ <sub>1</sub> 1,843,612	※ <sub>1</sub> 2,246,143
前払費用	82,481	84,812
未収入金	※ <sub>3</sub> 81,108	※ <sub>3</sub> 112,210
その他	※ <sub>3</sub> 45,930	※ <sub>3</sub> 40,193
貸倒引当金	△35,680	△45,598
流動資産合計	11,743,088	11,833,891
固定資産		
有形固定資産		
建物	※ <sub>2</sub> 827,854	※ <sub>2</sub> 780,268
構築物	※ <sub>2</sub> 13,580	※ <sub>2</sub> 11,670
機械及び装置	314,455	281,128
車両運搬具	6,343	9,505
工具、器具及び備品	39,359	64,518
土地	※ <sub>2</sub> 179,716	※ <sub>2</sub> 179,716
建設仮勘定	756	93,258
有形固定資産合計	1,382,065	1,420,064
無形固定資産		
特許権	4,500	3,750
ソフトウェア	9,339	4,094
電話加入権	612	612
無形固定資産合計	14,452	8,457
投資その他の資産		
投資有価証券	※ <sub>2</sub> 1,896,746	※ <sub>2</sub> 1,668,138
関係会社株式	2,408,452	2,409,652
出資金	1,050	1,050
長期貸付金	17,684	17,683
破産更生債権等	32,591	32,531
前払年金費用	343,034	373,331
差入保証金	※ <sub>3</sub> 1,355,380	※ <sub>3</sub> 1,076,538
長期未収入金	435,000	435,000
その他	41,760	38,507
貸倒引当金	△481,951	△481,914
投資その他の資産合計	6,049,749	5,570,519
固定資産合計	7,446,267	6,999,041
資産合計	19,189,356	18,832,933



(単位：千円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
<b>負債の部</b>		
流動負債		
買掛金	※2, ※3 3,672,214	※2, ※3 3,293,052
1年内返済予定の長期借入金	—	※2 3,500,000
未払金	※3 453,590	※3 520,930
未払費用	62,385	60,196
未払法人税等	118,911	45,665
預り金	24,327	24,792
前受金	877	782
賞与引当金	151,000	122,000
その他	5,654	3,220
流動負債合計	4,488,960	7,570,640
固定負債		
長期借入金	※2 3,500,000	—
資産除去債務	61,702	61,920
繰延税金負債	146,061	115,777
その他	46,452	51,452
固定負債合計	3,754,215	229,150
負債合計	8,243,176	7,799,790
純資産の部		
株主資本		
資本金	5,115,224	5,115,224
資本剰余金		
資本準備金	4,473,939	4,473,939
資本剰余金合計	4,473,939	4,473,939
利益剰余金		
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	814,060	1,060,369
利益剰余金合計	814,060	1,060,369
自己株式	△54,637	△55,985
株主資本合計	10,348,587	10,593,547
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	601,516	441,829
繰延ヘッジ損益	△3,923	△2,234
評価・換算差額等合計	597,593	439,595
純資産合計	10,946,180	11,033,143
負債純資産合計	19,189,356	18,832,933

## ②【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上高	※ <sub>2</sub> 20,934,509	※ <sub>2</sub> 20,818,185
売上原価	※ <sub>2</sub> 17,656,887	※ <sub>2</sub> 17,788,408
売上総利益	3,277,621	3,029,777
販売費及び一般管理費	※ <sub>1</sub> , ※ <sub>2</sub> 2,589,537	※ <sub>1</sub> , ※ <sub>2</sub> 2,638,431
営業利益	688,084	391,346
営業外収益		
受取利息	855	538
受取配当金	41,828	44,409
為替差益	—	21,355
業務受託料	※ <sub>2</sub> 4,562	※ <sub>2</sub> 4,560
受取ロイヤリティー	※ <sub>2</sub> 18,147	※ <sub>2</sub> 20,370
その他	※ <sub>2</sub> 11,910	※ <sub>2</sub> 19,119
営業外収益合計	77,304	110,353
営業外費用		
支払利息	31,437	31,438
貸倒引当金繰入額	35,582	—
債権売却損	2,908	3,011
為替差損	24,625	—
固定資産除却損	6,131	11,202
支払補償費	172	6,756
その他	3,718	※ <sub>2</sub> 2,593
営業外費用合計	104,576	55,002
経常利益	660,812	446,697
特別利益		
固定資産売却益	※ <sub>3</sub> 1,762	—
特別利益合計	1,762	—
特別損失		
投資有価証券評価損	63	—
特別損失合計	63	—
税引前当期純利益	662,511	446,697
法人税、住民税及び事業税	99,346	65,172
法人税等調整額	△45,058	38,156
法人税等合計	54,287	103,328
当期純利益	608,224	343,368

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本						
	資本金	資本剰余金		利益剰余金		自己株式	株主資本合計
		資本準備金	資本剰余金 合計	その他利益 剰余金 繰越利益 剰余金	利益剰余金 合計		
当期首残高	5,115,224	4,473,939	4,473,939	264,116	264,116	△49,922	9,803,358
当期変動額							
剰余金の配当				△58,279	△58,279		△58,279
当期純利益				608,224	608,224		608,224
自己株式の取得						△4,715	△4,715
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）							
当期変動額合計	—	—	—	549,944	549,944	△4,715	545,228
当期末残高	5,115,224	4,473,939	4,473,939	814,060	814,060	△54,637	10,348,587

	評価・換算差額等			純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	評価・換算差額 等合計	
当期首残高	604,425	△401	604,023	10,407,381
当期変動額				
剰余金の配当				△58,279
当期純利益				608,224
自己株式の取得				△4,715
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	△2,908	△3,521	△6,430	△6,430
当期変動額合計	△2,908	△3,521	△6,430	538,798
当期末残高	601,516	△3,923	597,593	10,946,180

	株主資本						株主資本合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金		自己株式	
		資本準備金	資本剰余金 合計	その他利益 剰余金 繰越利益 剰余金	利益剰余金 合計		
当期首残高	5,115,224	4,473,939	4,473,939	814,060	814,060	△54,637	10,348,587
当期変動額							
剰余金の配当				△97,059	△97,059		△97,059
当期純利益				343,368	343,368		343,368
自己株式の取得						△1,348	△1,348
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）							
当期変動額合計	—	—	—	246,308	246,308	△1,348	244,960
当期末残高	5,115,224	4,473,939	4,473,939	1,060,369	1,060,369	△55,985	10,593,547

	評価・換算差額等			純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	評価・換算差額 等合計	
当期首残高	601,516	△3,923	597,593	10,946,180
当期変動額				
剰余金の配当				△97,059
当期純利益				343,368
自己株式の取得				△1,348
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	△159,686	1,688	△157,997	△157,997
当期変動額合計	△159,686	1,688	△157,997	86,962
当期末残高	441,829	△2,234	439,595	11,033,143

## 【注記事項】

### (重要な会計方針)

#### 1. 資産の評価基準及び評価方法

##### (1) 有価証券の評価基準及び評価方法

###### ① 子会社株式

移動平均法による原価法を採用しております。

###### ② その他有価証券

###### ・時価のあるもの

期末日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）を採用しております。

###### ・時価のないもの

移動平均法による原価法を採用しております。

##### (2) デリバティブ等の評価基準及び評価方法

###### ① デリバティブ

時価法を採用しております。

##### (3) たな卸資産の評価基準及び評価方法

###### ① たな卸資産

主として移動平均法による原価法（貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）を採用しております。

#### 2. 固定資産の減価償却の方法

##### (1) 有形固定資産

定率法を採用しております。ただし、1998年4月1日以降に取得した建物（建物附属設備を除く）並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物	10年～50年
構築物	10年～15年
機械及び装置	4年～8年
工具、器具及び備品	4年～15年

##### (2) 無形固定資産

定額法を採用しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）による定額法を採用しております。

#### 3. 引当金の計上基準

##### (1) 貸倒引当金

債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等の特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

##### (2) 賞与引当金

従業員賞与の支給に備えるため、翌事業年度の支給見込額のうち、当事業年度の負担額を計上しております。

(3) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。

なお、当事業年度末における年金資産が退職給付債務を超過しているため、投資その他の資産の「前払年金費用」として計上しており、「退職給付引当金」の残高はありません。

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、期間定額基準によっております。

② 数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異については、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務年数以内の一定年数（8年）による定額法により按分した額を発生翌事業年度から費用処理しております。

4. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異の会計処理の方法は、連結財務諸表における会計処理の方法と異なっております。

(2) 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、期末日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

(3) ヘッジ会計の方法

原則として繰延ヘッジ処理を採用しております。なお、為替予約については振当処理の要件を満たしている場合は振当処理を、金利スワップについては特例処理の要件を満たしている場合は特例処理を採用しております。

(4) 消費税等の会計処理方法

税抜方式を採用しております。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。）を当事業年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更しております。この結果、前事業年度の貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」に表示しておりました140,184千円は、「固定負債」の「繰延税金負債」と相殺しており、「固定負債」の「繰延税金負債」に表示しておりました286,245千円の内、140,184千円は「流動資産」の「繰延税金資産」と相殺し、146,061千円と表示しております。

なお、上記のとおり繰延税金資産と繰延税金負債を相殺したことに伴い、変更前と比べて資産合計及び負債合計はそれぞれ140,184千円減少しております。

また、税効果会計関係注記において、税効果会計基準一部改正第4項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(1)(評価性引当額の合計額を除く。)に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前事業年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取扱いに従って記載しておりません。

(損益計算書)

前事業年度において、「営業外費用」の「その他」に含めていた「固定資産除却損」及び「支払補償費」は、金額的重要性が増したため、当事業年度より独立掲記しております。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行い、前事業年度の連結損益計算書において、「営業外費用」の「その他」に表示していた10,021千円は、「固定資産除却損」6,131千円、「支払補償費」172千円、「その他」3,718千円と表示しております。

(貸借対照表関係)

※1 たな卸資産の内訳は、次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
商品及び製品	1,384,073千円	1,701,584千円
仕掛品	130,799	136,442
原材料及び貯蔵品	328,740	408,116

※2 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は、次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
建物	807,723千円	763,286千円
構築物	13,580	11,670
土地	126,032	126,032
投資有価証券	602,187	410,780
計	1,549,523	1,311,769

担保付債務は、次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
買掛金	1,679,573千円	1,216,236千円
1年内返済予定の長期借入金	—	3,500,000
長期借入金	3,500,000	—
計	5,179,573	4,716,236

※3 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務（区分表示したものを除く）

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
短期金銭債権	437,606千円	465,454千円
長期金銭債権	198,400	197,440
短期金銭債務	2,958	3,539

(損益計算書関係)

※1 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度39%、当事業年度39%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度61%、当事業年度61%であります。

販売費及び一般管理費のうち、主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
発送配達費	281,931千円	306,829千円
従業員給与及び手当	482,701	469,620
賞与引当金繰入額	57,777	45,844
退職給付費用	13,456	27,629
減価償却費	34,518	30,984
賃借料	273,921	271,972
雑費	80,422	77,403
研究開発費	353,132	340,703
改良費	198,039	190,080

※2 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
営業取引による取引高		
売上高	1,600,310千円	1,880,751千円
仕入高	64,632	45,497
その他	253,501	251,821
営業取引以外の取引による取引高		
受取ロイヤリティー	18,147	20,370
その他	5,012	5,353

※3 固定資産売却益の内容は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
機械及び装置	1,731千円	一千円
車両運搬具	30	—
計	1,762	—

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式(当事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式2,408,452千円、関連会社株式1,200千円、前事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式2,408,452千円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
未払事業税	2,786千円	343千円
賞与引当金	46,236	37,356
棚卸資産評価損	17,189	10,897
繰越欠損金	1,382,743	1,328,531
投資有価証券評価損否認額	47,424	47,424
役員退職慰労金未払額	12,251	12,251
貸倒引当金	158,498	157,859
固定資産減損損失	60,746	60,746
関係会社株式	138,978	138,978
その他	33,169	33,823
繰延税金資産小計	1,900,024	1,828,212
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額	—	△1,212,787
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	—	△424,150
評価性引当額	△1,679,094	△1,636,938
繰延税金資産合計	220,930	191,273
繰延税金負債		
前払年金費用	△105,037	△114,314
その他有価証券評価差額金	△261,550	△192,365
その他	△403	△371
繰延税金負債合計	△366,991	△307,050
繰延税金資産の純額(△は負債)	△146,061	△115,777

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	30.9%	30.6%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.5	0.7
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△0.4	△0.6
住民税均等割等	2.5	3.2
税額控除等	△1.2	△1.6
評価性引当額の増減	△23.9	△9.4
税率変更による期末繰延税金資産の減額修正	△0.2	—
その他	0.0	0.2
税効果会計適用後の法人税等の負担率	8.2	23.1

(企業結合等関係)

該当事項はありません。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。



## ④【附属明細表】

## 【有形固定資産等明細表】

区 分	資産の種類	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (千円)	当期償却額 (千円)	当期末残高 (千円)	減価償却 累計額 (千円)
有形固定資産	建物	6,701,028	33,992	70,835	74,541	6,664,185	5,883,916
	構築物	390,897	—	—	1,909	390,897	379,227
	機械及び装置	7,115,794	69,675	34,939	102,850	7,150,530	6,869,402
	車両運搬具	54,960	8,339	5,080	5,178	58,220	48,715
	工具、器具及び備品	1,417,787	58,027	65,385	32,815	1,410,429	1,345,911
	土地	179,716	—	—	—	179,716	—
	建設仮勘定	756	304,609	212,107	—	93,258	—
	計	15,680,940	474,645	388,347	217,296	15,947,237	14,527,173
無形固定資産	特許権	13,000	—	—	750	13,000	9,250
	ソフトウェア	752,311	—	—	5,245	752,311	748,217
	電話加入権	612	—	—	—	612	—
	計	765,924	—	—	5,995	765,924	757,467

(注) 1. 当期増加額のうち主なものは次のとおりであります。

資産の種類	事業所	内 容	金 額
建物	草 加	工場インフラ設備関係	33,992千円
工具、器具及び備品	草 加	研究開発用設備関係	35,215千円
建設仮勘定	草 加	ディゾルバー及び付帯設備	65,362千円

2. 当期減少額のうち主なものは次のとおりであります。

資産の種類	事業所	内 容	金 額
建物	草 加	工場インフラ設備関係	59,844千円
工具、器具及び備品	草 加	研究開発用設備関係	24,255千円

3. 当期首残高及び当期末残高については、取得価額により記載しております。

## 【引当金明細表】

科目	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (千円)	当期末残高 (千円)
貸倒引当金	517,631	11,994	2,112	527,513
賞与引当金	151,000	122,000	151,000	122,000

(注) 貸倒引当金の当期減少額のうち洗替によるものは70千円、対象債権の回収による取崩は2,042千円であります。

## (2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

## (3) 【その他】

該当事項はありません。

## 第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社
取次所	_____
買取手数料	無料
公告掲載方法	電子公告により行う。ただし電子公告によることができない事故その他やむを得ない事由が生じたときは、日本経済新聞に掲載して行う。 公告掲載URL <a href="http://www.somar.co.jp/">http://www.somar.co.jp/</a>
株主に対する特典	該当事項はありません。

## 第7【提出会社の参考情報】

### 1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

### 2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

#### (1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度（第71期）（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）2018年6月27日関東財務局長に提出

#### (2) 内部統制報告書及びその添付書類

2018年6月27日関東財務局長に提出

#### (3) 四半期報告書及び確認書

（第72期第1四半期）（自 2018年4月1日 至 2018年6月30日）2018年8月13日関東財務局長に提出

（第72期第2四半期）（自 2018年7月1日 至 2018年9月30日）2018年11月12日関東財務局長に提出

（第72期第3四半期）（自 2018年10月1日 至 2018年12月31日）2019年2月14日関東財務局長に提出

#### (4) 臨時報告書

##### ① 2018年7月5日関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）に基づく臨時報告書であります。

## 第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

# 独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年6月26日

ソマール株式会社

取締役会 御中

## 有限責任監査法人トーマツ

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	飯野 健一	印
--------------------	-------	-------	---

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	大竹 貴也	印
--------------------	-------	-------	---

### <財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているソマール株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

### 連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

### 監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、ソマール株式会社及び連結子会社の2019年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### <内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、ソマール株式会社の2019年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

#### 内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

#### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

#### 監査意見

当監査法人は、ソマール株式会社が2019年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

---

(注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。

2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

# 独立監査人の監査報告書

2019年6月26日

ソマール株式会社

取締役会 御中

## 有限責任監査法人トーマツ

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	飯野 健一	印
--------------------	-------	-------	---

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	大竹 貴也	印
--------------------	-------	-------	---

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているソマール株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの第72期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

### 財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

### 監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、ソマール株式会社の2019年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

- (注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。